

日本動物看護学会 第22回大会

会期：平成25年7月6日(土)-7日(日)

会場：帝京科学大学千住キャンパス

(最寄駅：「北千住駅」JR、千代田線、日比谷線、つくばTXほか)

大会長：村上洋介(帝京科学大学)

〈大会テーマ〉

動物看護学教育の新展開

〈一般演題〉

口頭発表およびポスター発表

申込方法：日本動物看護学会ホームページに掲載 (<http://www.jsan.gr.jp/>)

申込〆切：2013年5月7日(火)



○大会企画シンポジウム



「動物看護過程論」Andrea Jeffery (ブリストル大学)
1990年に動物看護師、5年間 Animal Health Trust に従事、その間に小動物栄養師及び上級外科看護師の資格を取得。現在、ブリストル大学動物看護学科長で、英国獣医師協会評議員としても活躍中。

「動物看護のability model & case study」
Hilary Orpet (ロンドン大学)

1987年に動物看護師、1993年には上級外科看護師の資格を取得。現在、ロンドン大学獣医学部動物看護学科長で、英国獣医師協会の動物看護評議会評議員として活躍中。日本では動物看護ハンドブック“Handbook of Veterinary Nursing, 2nd.ed.”の著者としても知られる。



○学会企画シンポジウム：動物看護教育プログラム

○パネルディスカッション：動物看護教育の日英比較

参加料(事前申込は日本動物看護学会誌『Animal Nursing』添付の振込用紙で)

事前申込：学会員4,000円、非会員6,000円、学生1,000円

当日申込：学会員5,000円、非会員7,000円、学生1,000円

大会事務局(mail: jsan@animalweb.jp)

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

〒120-0045東京都足立区千住桜木2-2-1

特別協賛：ロイヤルカナンジャパン、株式会社インターズー

日本動物看護学会

第22回大会

抄録集

2013

7
Jul.



■開催日

2013年7月6日(土)・7日(日)

■会場

帝京科学大学 千住キャンパス



日本動物看護学会

新刊!



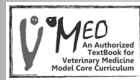
いま、動物たちの心身の健康増進に役立つ
獣医動物行動学が診療に求められています

獣医学教育モデル・コア・カリキュラム準拠

臨床行動学

森 裕司¹⁾ 武内ゆかり²⁾ 南 佳子³⁾ 著
コラム 尾形庭子⁴⁾ 入交眞巳⁵⁾

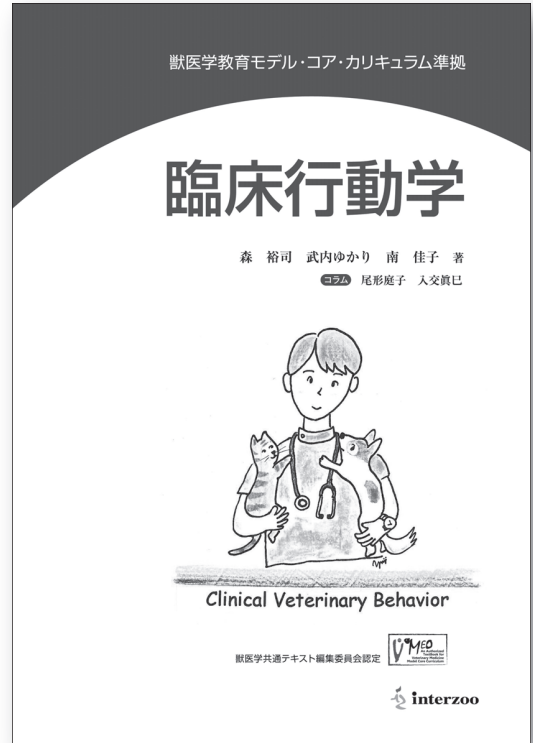
獣医学共通テキスト
編集委員会認定



- 1) 東京大学大学院 農学生命科学研究科 獣医動物行動学研究室 教授
獣医動物行動研究会 会長
- 2) 東京大学大学院 農学生命科学研究科 獣医動物行動学研究室 准教授
獣医動物行動研究会 事務局長
- 3) みなみ動物病院副院長 酪農学園大学 獣医学群 獣医保健看護学類 元教授
獣医動物行動研究会 副会長
- 4) Purdue University, Assistant Professor
米国獣医行動学専門医
- 5) 北里大学獣医学部 講師
米国獣医行動学専門医

獣医学教育モデル・コア・カリキュラム

大学卒業時まで身に付ける必要不可欠な知識を精選した教育内容のガイドライン。



定価 3,150 円 (本体 3,000 円 + 税) *
B5判 本文2色・164 ページ
カバー4色 並製本
*1 回のご注文につき別途送料が 525 円かかります。

本書の特長



- ・ 獣医動物行動認定医指定教科書
- ・ 日本人初の米国獣医行動学専門医2名が症例とトピックをコラム形式で紹介
- ・ 森裕司先生のユーモラスで心温まるイラストが満載

「序文」より一部抜粋

行動治療においては、行動特性の個体差に加え複雑で多岐にわたる飼育環境を反映して、教科書通りの症例に遭遇することの方がむしろ珍しいくらいであろう。それでも基本的な症例に対して適切な診断治療方法を正しく理解しておくことは非常に重要であり、そうした知識や考え方は実際のケースにおいても大きな力になるはずである。

主要目次

- 第1章 問題行動とコンサルテーション
- 第2章 行動治療の方法
- 第3章 犬における攻撃性に関連する問題行動
- 第4章 犬における恐怖・不安に起因する問題行動およびその他の問題行動
- 第5章 猫における問題行動
- 第6章 犬・猫以外の動物における問題行動
- 第7章 問題行動の予防

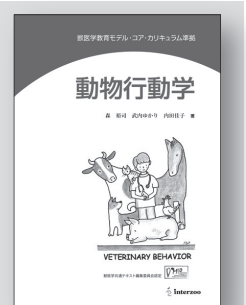
姉妹書

体系づけられた獣医動物行動学の
リテラシーを学べる1冊

獣医学教育モデル・コア・カリキュラム準拠

『動物行動学』

森 裕司 武内ゆかり 内田佳子 著
定価 3,150 円 (本体 3,000 円 + 税) *
B5判 本文2色・184 ページ
カバー4色 並製本



 **interzoo**
〒150-0002
東京都渋谷区渋谷 1-3-9
東海堂渋谷ビル 7F

受注専用TEL.
0120-80-1906
お電話受付: 平日10:00~18:00


受注専用FAX.
0120-80-1872
FAX受付: 年中無休・24時間受付

●インターネットで
<http://www.interzoo.co.jp/>

動物看護の教科書 全6巻

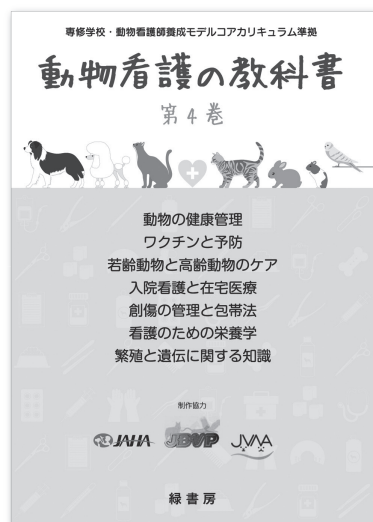
制作協力  公益社団法人
日本動物病院
福祉協会

 一般社団法人
日本臨床獣医学
フォーラム

 一般社団法人
日本動物看護職
協会

B5判 オールカラー
各巻192~224頁
定価各4,725円(本体4,500円+税)

専修学校の動物看護師養成モデルコアカリキュラムに準拠し、
動物看護師統一認定試験の出題範囲を網羅した初めてのテキスト




J A H A ・ J B V P ・ J V N A 制作協力により
実践的な動物看護教育を学ぶことができる

- 最新の動物看護の知識と臨床技術を体系的に学ぶことができる。
- 章ごとに学習目標と確認問題を掲載し、予習・復習における知識の整理に役立つ。
- 豊富なイラスト・写真・図表と簡潔な文章で理解が深まる。

日本動物看護学会 第 22 回大会 抄録集

開催日：2013年7月6日（土）・7日（日）

会場：帝京科学大学 千住キャンパス 本館

日本動物看護学会 

目次

大会長挨拶	1
開催概要	2
大会運営についてのお願い	3
大会プログラム	4
アクセスマップ	6
フロアマップ	7
出展社一覧	8
要旨	
シンポジウムⅠ 要旨	9
パネルディスカッション 要旨	15
学会企画シンポジウム 要旨	17
シンポジウムⅡ 要旨	19
一般演題一覧	24
一般演題（口頭発表）要旨	29
一般演題（ポスター発表）要旨	45
日本動物看護学会 第22回大会 実行組織	60

日本動物看護学会第 22 回大会長挨拶

日本動物看護学会第 22 回大会
大会長 村上 洋介

日本動物看護学会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。
このたび、日本動物看護学会第 22 回大会を 2013 年 7 月 6 日（土）と 7 日（日）の 2 日間、帝京科学大学千住キャンパスにおいて開催させていただくことになりました。本学会の会員をはじめ多くの皆様のご参加をいただき、司宰機関として心より歓迎申し上げます。また、多数の関係団体並びに企業の皆様には後援や協賛の形で多大のご支援を賜りました。日頃のご厚情に加えあらためて厚くお礼申し上げます。

さて、今年 2 月には動物看護師統一認定機構によるわが国では初めてとなりました動物看護師統一認定試験が行われました。また、これに先立ち、全国動物保健看護系大学協会並びに一般社団法人全国動物教育協会を中心とした関係者のご尽力により、動物看護学教育標準カリキュラム（大学）および動物看護師養成モデルコアカリキュラム（専修学校）が策定されるなど、動物看護学教育を取り巻く情勢は大きく変化しています。

そこで、第 22 回大会では、大会テーマを「動物看護学教育の新展開」とし、一般講演のほか、英国で動物看護教育に携わっている大学学科長 2 名を招聘してシンポジウム等を開催、動物看護教育の深化とますますの発展に貢献して参りたいと考えております。

日本動物看護学会の目的は、学会会則にもございますとおり、動物看護に関する研究を中心として、会員相互の情報交換の場を設け、この分野における研究の進展を図ることです。そしてその研究は教育と表裏をなすものであります。日本動物看護学会から動物看護師の資格を交付する機能が外れた現在、名実ともに学術団体として生まれ変わった日本動物看護学会がわが国における動物看護学の教育に果たす役割はますます大きくなるものと思われまます。

日常の動物医療で遭遇する課題や知見さらに関連する研究成果を持ち寄っての一般演題およびシンポジウムやパネルディスカッションを通じて、熱気あふれる議論や有意義な意見交換が行われますことをおおいに期待しております。また、会場眼下にはこのほど完成した隅田川テラスを越えて東京スカイツリーが眺望できます。学会の後には東京の新名所も是非楽しんで頂ければ幸いです。

大会の運営にいたらぬところがありご迷惑をおかけするかもしれませんが、どうか一人でも多くの参加者の皆様が多くの果実を摘み取られることを祈念し、日本動物看護学会第 22 回大会の司宰機関からのご挨拶と致します。

開催概要

日本動物看護学会 第22回大会

開催日

2013年7月6日(土) ・ 7日(日)

会場

帝京科学大学千住キャンパス 本館3階 (アクセスマップをご覧ください。)
受付：3階エレベーター前

主催

日本動物看護学会

〒107-0062

東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館23階

TEL : 03-6804-2659 FAX : 03-5298-2649

URL : <http://www.jsan.gr.jp> E-mail : info@jsan.gr.jp

大会長

村上 洋介 (帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授)

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

〒120-0045 東京都足立区千住桜木2-2-1

大会運営についてのお願い

参加者の方へ

- 必ず受付を済ませ、名札をお受け取りください。
- 両日とも、大学内の食堂はご利用できません。
- 駐車場のご用意がございませんのでお車でのご来場はご遠慮ください。
- 近隣に住宅街や教育施設があるため、開催会場周辺の路上での喫煙や飲食等のご遠慮ください。
- 2日間参加の方は、1日目は名札をお持ち帰りになり、再度2日目にお使いください。

口頭発表の方へ

- 発表時間は質疑応答2分を含め10分間です。持ち時間を厳守してください。
- 次の発表者は、前の発表者が始まる前までに次演者席にご着席ください。
- 発表の際は、発表者ご本人によるパソコン操作をお願いいたします。

ポスター発表の方へ

- 各ポスターパネルに演題番号とタイトル等が表示されています。ご自分の演題番号のパネルに掲示してください。
- ポスターは、7日10:00までに掲示してください。
- 掲示したポスターは7日17:00までに撤去をお願いします。
- コアタイムは7日11:30～12:30です。この時間帯にポスターの前に立ち、説明と質疑応答を行ってください。

座長の方へ

- 口頭発表は発表8分間、質疑応答2分間の10分間です。進行にご配慮をお願いします。
- 次座長は、20分前までに会場にお越しください。

学会企画シンポジウム 昼食

- 事前申込済みの方は、受付時にお弁当引き換え券を配布します。12:30～シンポジウム開始までの間で取りに来てください。
- お弁当配布場所は1311教室前フロアです。
- 事前申込で定員に達している場合は、お弁当がない場合があります。

大会プログラム

● 7月6日(土) 10:00~19:00

会場	9:30	10:00		11:00		12:00		13:00		14:00		
第1会場 1311教室								13:00-15:00 シンポジウム I 「動物看護過程論」				
第2会場 1309教室 1310教室								13:00-17:30 企業展示				
第3会場 1305教室 1306教室					11:30-13:00 編集委員会							
第4会場 1303教室 1304教室		10:00-11:30 理事会			11:30-12:30 評議員会							
大学内 カフェテリア												

● 7月7日(日) 10:00~18:00

会場	9:30	10:00		11:00		12:00		13:00		14:00		
第1会場 1311教室		10:00-12:30 口頭発表					休憩 (30分)	13:00-14:30 学会企画シンポジウム 「動物看護になぜ研究が 必要か？」			休憩	
第2会場 1309教室 1310教室		10:00-17:00 ポスター発表			11:30-12:30 ポスター発表 (コアタイム)							
		10:00-17:00 企業展示										

会場	14:00		15:15	16:00	17:00	18:00
第1会場 1311教室		休憩	15:15-17:30 パネルディスカッション 「動物看護教育の日英比較」			
第2会場 1309教室 1310教室	13:00-17:30 企業展示					
第3会場 1305教室 1306教室						
第4会場 1303教室 1304教室						
大学内 カフェテリア						17:45～ 懇親会

会場	14:00		14:45	16:00	17:00	18:00
第1会場 1311教室		休憩	14:45-17:00 シンポジウムⅡ 「動物看護の ability model & case study」		17:00-18:00 第19回定時総会	
第2会場 1309教室 1310教室	10:00-17:00 ポスター発表					
	10:00-17:00 企業展示					

ACCESS

帝京科学大学 千住キャンパス本館

〒120-0045 東京都足立区千住桜木 2-2-1



※千住キャンパスには駐車用スペースがございませんので、電車・バスなど公共交通機関をご利用の上、お越しください。

■主な主要駅からの所要時間（参考）

「大宮駅」から約36分・「新宿駅」から約23分・「東京駅」から約15分・「春日部駅」から約20分・「柏駅」から約20分
JR常磐線、東武スカイツリーライン(東武伊勢崎線)、東京メトロ千代田線・日比谷線、つくばエクスプレス

「北千住駅」下車

または 京成本線、東京メトロ千代田線、都電荒川線

「町屋駅」下車

■北千住駅からのアクセス

★徒歩の場合：北千住駅西口より直進、国道4号（日光街道）を横断し千住竜田町交差点を右折、墨堤通りを直進して帝京科学大学前交差点を左折 徒歩約20分

★バスの場合：北千住駅西口2番乗り場 北01「西新井大師（本木新道経由）」行き
千住桜木バス停（墨堤通り側）下車 徒歩約1分
北千住駅西口3番乗り場 端44「駒込病院前」行きに乗車 千住桜木バス停（尾竹橋通り側）下車 徒歩約3分
王45「王子駅前」行きに乗車 千住桜木バス停（墨堤通り側）下車 徒歩約1分
北千住駅西口4番乗り場 北02、03「西新井大師（100号・本木二丁目・西新井駅経由）」行き
北04「西新井駅西口」行き
北05「江北駅」行き
千住桜木バス停（墨堤通り側）下車 徒歩約1分

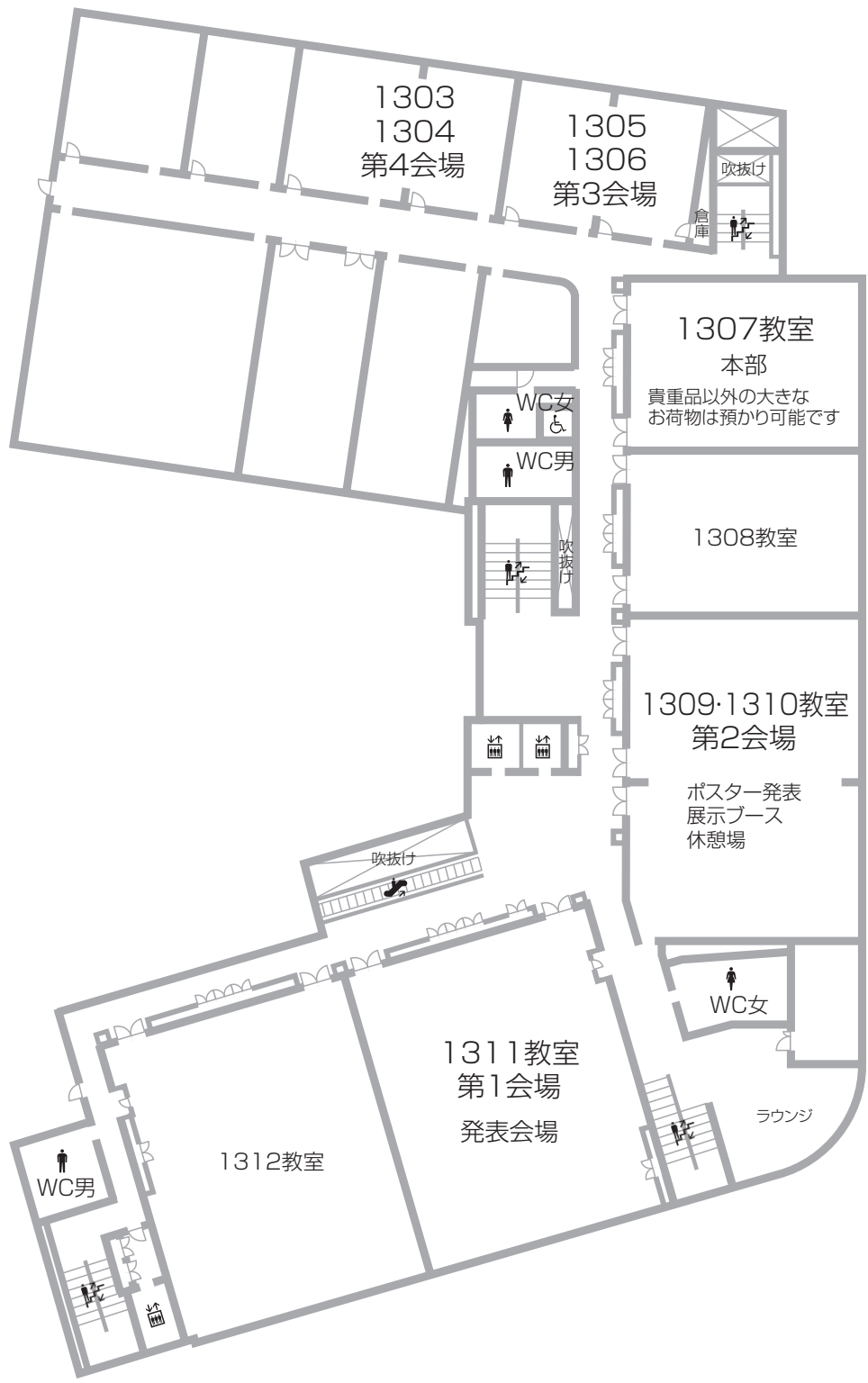
■町屋駅からのアクセス

★徒歩の場合：町屋駅から尾竹橋通りを尾竹橋方面へ直進、尾竹橋を渡りすぐ右折し隅田川のスーパー堤防沿いに進む 徒歩約18分

★バスの場合：町屋駅前1番バス乗り場から 草41「足立梅田町」行きに乗車 千住桜木バス停（尾竹橋通り側）下車 徒歩約3分

フロア図

帝京科学大学 千住キャンパス 本館3階



出展社一覧

アズサイエンス株式会社

一般社団法人 ペットフード協会

一般社団法人 動物看護職協会

尾崎理化株式会社

株式会社インターズー

株式会社 AVS

株式会社オルツ

株式会社キリカン洋行

株式会社ニッピ

株式会社日本ベテリナリーサプライズ

株式会社緑書房

シキボウ株式会社

日本ヒルズ・コルゲート株式会社

マースジャパンリミテッド

有限会社友愛メディカル

ロイヤルカナン ジャポン合同会社

(五十音順)

シンポジウム I

「動物看護過程論」

要旨

座長 松原孝子（日本獣医生命科学大学）
講演 Andrea Jeffery（ブリストル大学）

7月6日（土） 13：00～15：00

会場：第1会場 1311 教室

シンポジウムⅠ 「動物看護過程論」

座長 松原孝子¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学

動物看護師は、獣医療の中で動物看護師でなければならない独自の仕事、専門性について常に実践していかなければなりません。動物看護の対象、目的、達成するための具体的な方法、およびその本質を常に明らかにしていく必要があります。

質の高い動物看護を対象となる動物および飼い主の双方に提供していくために「動物看護過程」が用いられます。看護過程は、対象動物の健康問題をアセスメントし、解決するために計画を立て、看護実践し、その結果を評価する一連の実践課程です。

今回のシンポジウムでは「動物看護過程」を徹底検討するため、講師として英国より Andrea Jeffery 先生をお招きしました。Jeffery 先生は動物看護師でありブリストル大学では動物看護師養成に関わり学科長をされています。

日本でも動物看護過程を実践している、これから実践しなければならない動物看護師にとって、シンポジウムは格好の学習の場となるでしょう。一人でも多くの動物看護師が参加され、熱い議論ができることを期待いたします。

動物看護過程入門

アンドレア・ジェフリー

～講師紹介～

英国ブリストル大学 獣医学部 動物看護学科長。英国認定動物看護師。修士。英国獣医師会評議員。
主な著作 : Jeffery A & Ford-Fennah S. The nursing process, nursing models and care. In: BSAVA Textbook of Veterinary Nursing. Cooper, B., Turner, L., Mullineaux, L. (Eds.) 346-364. 2011. Wiley.
Jeffery A. Advanced nursing practice. In: BSAVA Manual of Canine and Feline Advanced Veterinary Nursing, 2nd Ed. Moore, AH. Rudd, S. (Eds.) 2008.

Introduction to **THE NURSING PROCESS** By Andrea Jeffery

What is nursing?

In the light of recent discussion surrounding the regulation of veterinary nurses, it is important that we consider what a veterinary nurse actually does. If we can define our own unique body of knowledge, i.e. the theory that underpins what we do, we may then be able to define our role. Unfortunately much of the knowledge has been borrowed, like human nurses, from the medical profession.

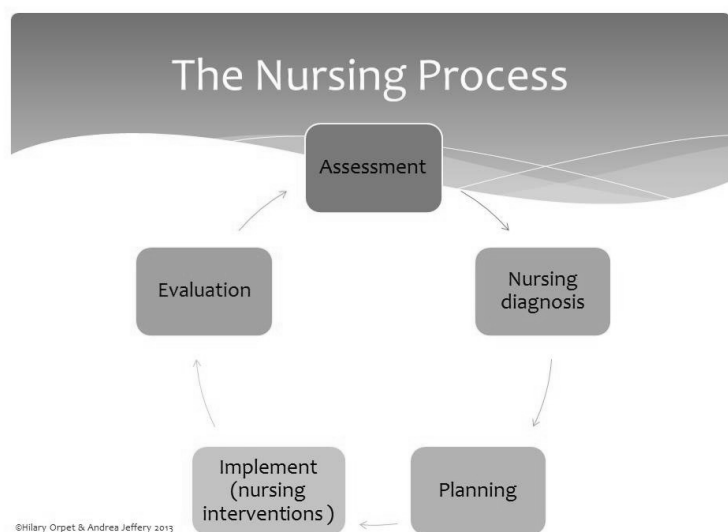
How do you know how to care for a particular patient?

When caring for a patient we carry out the veterinary surgeons requests but also contribute to the general well being of the patient. Grooming or encouraging the patient to eat, spending extra time with a patient that is uncomfortable or afraid. When nursing a patient we treat the illness and administer medication but the extra time spent in ensuring the patient is comfortable, able to move around is just as important. The term 'holistic care' or 'holistic nursing' encompasses this way of nursing the whole animal rather than just its disease. This brings us back to the question of how do we know how to care for the patient? What method of assessment is used to ensure we nurse the patient holistically?

The Nursing Process

The nursing process provides a structure to the process of planning the care for the patient. This ensures we assess the patient in such a way as to highlight issues, which may affect the way we care for our patients. Once we have assessed the patient we plan how we might carry out the care. Following the planning stage the care plan that we have drawn up is then implemented. Evaluation is then important in order to assess the effectiveness of the care we have given.

The nursing process is divided into five stages but should be a cyclical process with continuous assessment and evaluation during

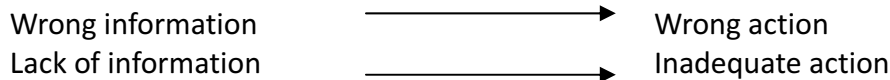


the patients stay in hospital and often continuing when they go home if aftercare is required.

ASSESSMENT STAGE

Assessment must clearly establish the individuality of the patient. Only then can effective care be delivered. It is important to collect appropriate information on the patient, this may be done by your own observations, information from the client and other members of the team. It helps to identify the patients' *actual* and *potential* nursing problems. Some of these problems may be linked to specific medical problems whilst others may be more specific to that individual, involving psychological or social status. It is important to collect the information systematically and write it down. Each stage of the nursing process is of equal importance to its overall effectiveness of improving patient care. If we skimp on one stage it will be reflected in the quality of the next. This is particularly important for the assessment stage as assessment forms the basis for the remainder of the nursing process.

Gathering information about a patient is very important. It sets the scene for any action to be taken.



PLANNING STAGE

The planning stage focuses on how you are going to achieve the care required for each particular patient. It involves creating a 'care plan' and setting achievable goals. From the previous assessment stage, various problems may have been identified. It is these problems that require prioritising before the goals are set. It is important that the long-term goals are identified, but in order to carry out the care plan, short-term goals must be put in place in order that the care plan is achievable.

The care plan

A plan is created based on the problems identified in the assessment stage. It lists all the nursing interventions needed to achieve the goals. It should also be written in enough detail so that any nurse reading it would know what the plan is and be able to continue the nursing care.

IMPLEMENTATION STAGE

The implementation stage is the 'doing' phase of the nursing process. Carrying out the nursing interventions of the care plan. The care plan should be written in a way that any nurse is able to follow it, with clear instructions on what needs to be done. The Nursing Process does not however specify the particular actions required to achieve the outcomes, as it is assumed these techniques will have already been learnt.

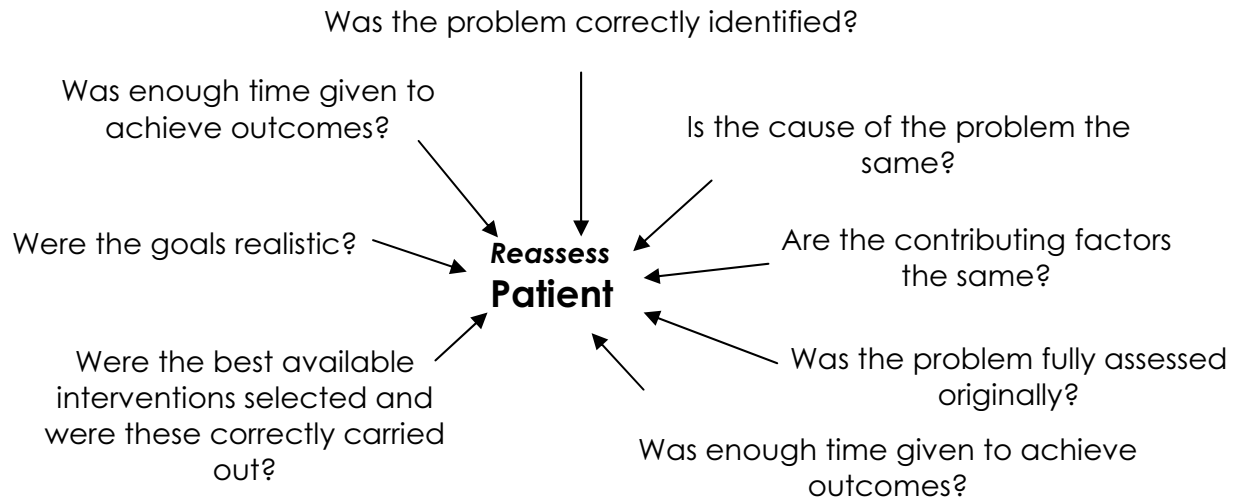
EVALUATION STAGE

This is a crucial phase of the nursing process. It is difficult to justify planning and implementing nursing interventions if the outcomes cannot be shown to have benefited the patient. If you have decided on the correct nursing interventions, then it is hoped that the evaluation stage will show the goals have been achieved. If not then the following questions may be asked:

- ❑ Has the goal been partially achieved or is more information needed to decide the next step?
- ❑ Is the problem unchanged and should the nursing intervention be changed or stopped?
- ❑ Is there a worsening of the problem, in which case the nursing intervention requires reviewing?

You also need to consider whether the goal may have been inappropriate. It is achievable or does the goal require intervention from other members of the veterinary team?

If the goals set have not been achieved!



By asking ourselves these questions we are effectively revising the nursing plan to address the issues that have become apparent during the evaluation. Re-evaluation then follows by assessing the patient again and repeating the whole process. Re-evaluation and re-assessment is also important as the patient gets better and becomes more independent, other problems may become more of a priority.

Correct use of the nursing process should therefore enable the nurse to:-

1. Provide each patient with individual care of a high standard.
2. Communicate effectively with and involve both patient and their family in the nursing care
3. Maintain continuity of care between members of the nursing team
4. Communicate effectively with other professional colleagues
5. Provide clear written records of nursing care for professional and legal purposes.
6. Develop effective methods of evaluating and reviewing care.

私たちアズサイエンスは、科学機器・産業機器・医療機器・試薬販売を通して、地域社会の健康増進と産業の発展に寄与します。

■取扱品目

研究用試薬・工業薬品

分析機器

理化学機器

医療機器

動物用検査機器

動物用実験器具



AZ. アズサイエンス株式会社

SCIENCE

本社・松本営業所	〒399-8754 長野県松本市村井町西2-3-35 TEL 0263-58-0021
東京営業所	〒135-0031 東京都江東区佐賀1-18-8 佐賀町MDビル4F TEL 03-5843-8155
横浜営業所	〒242-0023 神奈川県大和市渋谷6-1-4 TEL 046-279-6100
甲府営業所	〒409-3867 山梨県中巨摩郡昭和町清水新居601-1 TEL 055-222-5131
御殿場営業所	〒412-0024 静岡県御殿場市東山287-11 TEL 0550-81-5959
宇都宮営業所	〒321-0901 栃木県宇都宮市平出町385-15 TEL 028-661-5616
つくば営業所	〒305-0821 茨城県つくば市春日3-12-9 TEL 029-860-6350
新潟営業所	〒950-2054 新潟県新潟市西区寺尾東1-19-19 TEL 025-269-5161
長野営業所	〒389-0802 長野県千曲市内川618-3 TEL 026-261-0555
上越営業所	〒942-0074 新潟県上越市石橋2-9-41 TEL 025-539-0160

最新情報・メーカー検索は、ホームページより <http://www.nfsweb.co.jp>
お問い合わせは nfs.office@nfsweb.co.jp または弊社担当者まで

人とペットの
より良い未来のために。

一般

ペットフード / ペットマナー検定制度

ペットの健康管理の基本となる「食」の大切さ、家族としての義務、またペットがもたらす心と体の健康について等、ペットと一緒に暮らす上で必要な正しい知識を網羅しました。

- ・インターネット上での試験のみとなります。
- ・受験コース

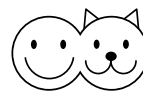
犬コース … 3,000円(税込) 猫コース … 3,000円(税込)

※両コースを受験する方は、個別にお申し込みが必要となります。

検定試験実施日時

年6回
奇数月1日～14日実施

ペットを愛するすべての人へ。



PET FOOD &
PET MANNERS
ペットフード / ペットマナー検定

受験申込・テキスト購入随時受付中!

お申し込み・詳細は <http://petfood-kentei.jp>

販売者

ペットフード販売士認定制度

「ペットフード販売士」の資格は、販売や相談に携わる方が、お客様の質問に的確な回答をするために有益な知識および情報を習得していただき、店頭や商談及び動物病院での相談等にお役に立てる内容となっており、ペットの適正な発育と健康維持・増進に寄与することとしています。

尚、講習会ではペットフード安全法およびペットフード、ペット用サプリメントに関する薬事法についての最新の情報を農林水産省の御担当者様よりご説明頂きます。

講習会・試験

年1回
平日1日間開催予定

専門テキスト項目

- ① 犬と猫の生理学
- ② 基礎栄養学
- ③ ペットフードについて
- ④ 関連法規
- ⑤ ペットフードの製造・保存
- ⑥ 店頭や動物病院でのQ&A
- ⑦ 飼育の基礎マナー

お申し込み・詳細は <http://petfood-kentei.jp/pro>

パネルディスカッション

「動物看護教育の日英比較」

要旨

座長	左向敏紀（日本獣医生命科学大学）
パネラー	Andrea Jeffery（ブリストル大学）
パネラー	Hilary Orpet（ロンドン大学）
パネラー	古川敏紀（倉敷芸術科学大学）
パネラー	石岡克己（日本獣医生命科学大学）

7月6日（土） 15:15～17:30

会場：第1会場 1311 教室

動物看護師教育の日英比較シンポジウム

左向 敏紀¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科

2008年日本では、動物保健看護教育を推進する5大学が、動物保健看護学教育の推進と動物看護並びに獣医療の発展に貢献するため、全国動物保健看護系大学協会を設立しました。そして、2011年12月3日検討を重ね、高位平準化された動物看護学教育の中心とすべく創案されたのがこの「動物看護学モデル・コア・カリキュラムの基準となる教育項目一覧」を、さらに、2012年11月2日「動物看護学標準カリキュラム」を公開したところです。この内容は、高度な専門知識を持った動物看護の専門家として獣医師と共に獣医療を担うことが出来る人材の育成を目的としています。具体的には、小手先の技術の習得ではなく、獣医学とほぼ同等の基礎知識を学び、その知識に裏付けされた動物看護学ならびに動物看護技術を修得し、最終的には獲得した知識・技術を基に考え、行動することが出来る人材の育成を目指して編成されています。

今回、ブリストル大学 Andrea Jeffery 先生 ロンドン大学 Hilary Orpet 先生をお迎えし、動物看護教育の目的を達成するために、イギリスの大学のカリキュラムのお話を参考にしながら、動物看護師の養成に関するために必要な「動物看護学カリキュラムの基準となる教育項目」を考えてみたいと思います。

今日のシンポジウムの内容が、今後の動物看護教育の改善充実と高位平準化に寄与できればと思います。パネラーの皆さん、会場の皆さんの忌憚のないご意見を期待しております。

学会企画シンポジウム

「動物看護になぜ研究が必要か？」～働きながら研究するために必要なこと～

要旨

座長	松原孝子（日本獣医生命科学大学）
話題提供者	伊奈求（日本獣医生命科学大学） 高橋真規子（株式会社インターズー）
指定討論者	岡安亜紀佳（うちだペットクリニック） 左向敏紀（日本獣医生命科学大学） 若尾義人（ヤマザキ学園大学）

7月7日（日） 13：00～14：30

会場：第1会場 1311 教室

私の動物看護研究の取り組み

岡安 亜紀佳¹⁾

1) うちだペットクリニック

以前より自分自身のスキルを高めるために、興味のある分野の勉強会には積極的に参加してきた。私自身の目標である「動物看護の質を向上させ、もっと対象により良い看護を提供したい」という思いを達成するためには、動物看護を明らかにし、一つひとつの看護の方法を科学的・論理的に説明する必要がある事を学んだ。卒後教育や現任教育の確立がされていない現状において、継続教育現場でもある動物病院の役割はとても重いと考えられる。そこで個人の学びで終わらせるのではなく、学んだ事を院内に還元し、学びを共有する必要性を感じ、院内勉強会を始めた。動物看護研究は、その過程の中から生まれた。

病院全体の看護の質の向上を目指して、まず動物看護記録を院内に取り入れる事から始め、同時に月に1度の院内勉強会を実施した。この勉強会は、現在も継続して行っている。テーマは、身近なもので、その時入院している子の看護の過程だったり、外来で気になった事例を振り返ったり、電話で困った事だったり、亡くなってしまった子の対応だったり、皆の『なぜ?』『どうしたらよかったのだろうか?』を取り上げている。特に2009年度からは、動物看護倫理を院内に取り入れようと、ジレンマを感じた事例を分析する学習も取り入れた。このような院内勉強会を重ねる内に、私自身の中で、院内教育の必要性をさらに強く認識するようになっていった。

院内で普段の仕事をしながら、学び続けるためには、一人一人が、継続学習の必要性を理解し、強要されるからではなく、心から楽しめる環境を作る事が大切である。また、このような院内勉強会をする為には、一緒に学習してくれる動物看護師の存在だけでなく、学習に必要な資料作りや学習時間の調整、容認してくれる院長の存在など様々な環境も必要である。日々の業務の中で動物看護師全員が共有するための勉強会の時間は限られている為、事前学習をし、学習時間の短縮を図っている。

継続して院内勉強会を行う事や、自分自身の看護を言葉にし、思いを人に伝えるようになるには訓練が必要であり、臨床の現場は一つひとつの事例を振り返り、立ち止まり考える事のできる素晴らしい場であることを認識した。動物看護師として働く中で一番大切に重要だと感じることは、看護する事を心から楽しめる事である。対象と関わり、実践した事で、良くなったり、上手くいかなかったり、失敗したり、そこから『どうすればよかったのだろうか?』と常に考え、もっと良い看護をする為にどうしたら良いか考えることこそが大切であり、そして何よりそれを共有できる仲間がいて、共に考える事こそが最も重要であると言える。

シンポジウム Ⅱ

「動物看護の ability model & case study」

要旨

座長 桜井富士朗（帝京科学大学）
講演 Hilary Orpet（ロンドン大学）

7月7日（日） 14：45～17：00

会場：第1会場 1311 教室

動物看護モデル作成への挑戦

座長 桜井 富士朗¹⁾

1) 帝京科学大学

フロレンス・ナイチンゲールは、医療と看護は明らかに区別されるべきと考えていました。医学モデルでは、病気の原因として解剖学的、生理学的、生化学的機能不全を強調し、疾病指向のアプローチをしていきます。動物看護師は、疾病指向ではなく、患者動物の個性やとりまく環境もふまえた全体指向のアプローチ、看護を実践すべきなのです。今回のシンポジストの Hilary Orpet 先生は、動物看護師としてロンドン大学の学科長をされており、動物看護師養成教育にも深く関わっています。

ヒトの看護臨床教育では、ヒト用に開発された様々な看護モデルが開発されています。動物臨床に適応した「動物看護モデル」を持たない動物看護師は、これまでヒトの看護モデルを応用し使用する試みを続けてきました。

Orpet 先生は動物看護師として、ヒトの看護モデルである「Roper, Logan & Tierney のモデル」や「Orem のセルフケアモデル」を参考に「Orpet & Jeffery Ability Model 2007」を開発しました。

シンポジウムは、この画期的な動物看護モデルを中心に展開されます。フロアからは、さらに発展的で野心的な動物モデルの創造へと結びつくような、熱い議論を期待いたします。

Ability Model (Orpet & Jeffery 2007)の実行 ヒラリー・オーペット

～講師紹介～

英国ロンドン大学 獣医学部 動物看護学科長。英国認定動物看護師，学士，上級外科動物看護師，英国獣医師会動物看護評議会評議員。

主な著作：Orpet, H. & Welsh, P. Handbook of Veterinary Nursing, 2nd.ed. 2010. Wiley-Blackwell.

Implementing the Ability Model (Orpet & Jeffery 2007)

By Hilary Orpet

There are many models of nursing that can be used or adapted to inform the practice of nursing. Unfortunately they are based on the nursing care of humans. Roper, Logan & Tierney's model is based on the 12 activities of living – the essentials requirements for being a healthy human. This model has been adapted to be used with animals as the assessment of the 12 activities can mostly relate to assessment of our patients needs.

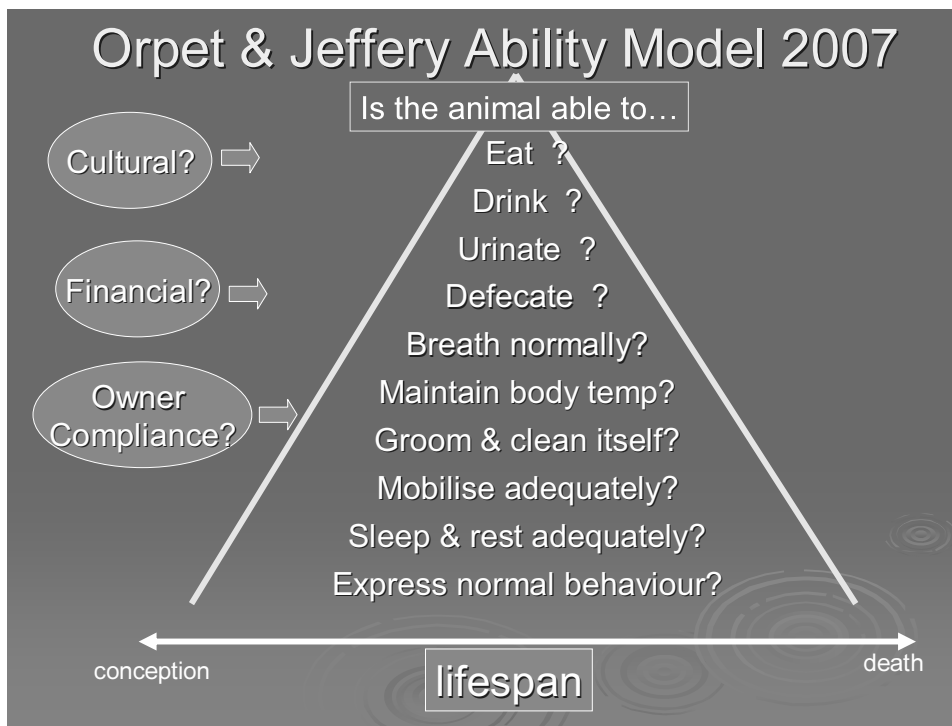
The Ability Model is the first veterinary model of nursing which has been published (Orpet & Welsh 2011)

The care of a patient starts when the animal enters the practice, usually with their owner. If the animal is to be admitted, there are certain questions that are required to ensure we have the correct information. Most of these are covered during the completion of the consent form or from consultation with the veterinary surgeon, but do you have enough information? We constantly take measurements of our patients; temperature, respiration rate, oxygen saturation, and evaluate organ function through measurements of electrolytes, enzymes etc. in the blood. These values are useless unless we know what normal values should be. This should also go for the nursing care for our patients – do you know what the animals' normal routine is?

Assessment

Initial assessment of the patient can take the form of a questionnaire that the owner completes before or during the admission of their animal. The information you need is based on the 10 Abilities of the animal – however the writing of the questions for the owner is important to elicit the information you need. For example; “*does your pet eat adequately?*” would probably result in a *yes/no* answer. However “*what does your pet normally eat, how much and at what times?*” will hopefully give you a better idea. Of course finding out the animals favourite food is important when tempting the inappetent animal.

The next stage is your nursing assessment of what the animal can or cannot do now it has been admitted. Again this is using the same 'checklist' of 10 'abilities' from the model. Transfer the information to your nursing assessment form. You may find you wish to skip the questionnaire part and enter the information gained from the client directly to the assessment form. However, giving the questionnaire to the clients prior to the admission gives them an opportunity to think clearly about their answers and often clients feel that the practice value their pets and the care given to them.



The Care Plan

From the information you have gained from the assessment, certain problems will have been identified – the ‘inabilities’ of the patient. It is important to also consider potential problems that may occur so they can hopefully be prevented. This stage is can be useful in informing student or less experienced nurses – it helps them to consider all aspects of care required by the animal. Once you have identified the nursing problems the nursing care is planned. This involves goals being made by the nurse and the patient (or owner!). Generally the planning of goals is primarily made by the nurse – however long term patients often need the owners’ compliance. Goals may be short term, midterm or long term. They need to be achievable so often several short term goals are made to reach the ultimate long term goal. The nurse then decides on the appropriate nursing interventions to achieve the specified goals. Setting goals is important to validate the nursing decision made and also to measure the outcomes of the nursing intervention.

Implementing the care

The planned nursing interventions should be specific and measurable. Detail in the care plan is important, remember everyone needs to know exactly what the nursing intervention is and how often, or how much is required.

Evaluation

In order to evaluate effectively, you should carry out the assessment phase again. From each of the 10 ‘abilities’, assess what the animal can now do or still not do by itself. Hopefully the nursing interventions have worked and the animal is now more ‘able’ than when admitted. If not, look again at the care given and adjust the plan as necessary. This may require changing the goals to make them achievable in the time frame given.

Influencing factors

The assessment and consequent nursing care that is carried out may be affected by other factors. The life stage of the animal is an important factor to consider – neonates are unable to feed, drink, keep warm, mobilise by themselves and this is when they are healthy. Geriatrics may have their senses affected purely by the fact they are old. Mobility may be decreased due to joint pain, muscle stiffness etc.

Cultural differences may affect the care given to the animal. What role does the pet play in the owners' life – working dog? Only companion? Breeding animal? Intensive palliative care may be required if the owners beliefs prevent the animal from being euthanased.

There may be financial implications that prevent the care that the animal requires taking place. What alternatives are there? Working with the owner, the nurse may be able to teach basic care techniques or rehabilitation methods when perhaps full physiotherapy and hydrotherapy is prohibitively expensive for the client.

Nursing involves not only caring for your patient but liaising with the owner regarding the nursing care given. The nurses' role is invaluable in maintaining the communication between the client and the practice. Nurses often speak to clients to reassure them of how their pet is progressing in the hospital. Once the animal goes home the care continues in the home. Nurses need to ensure the owner is able to, and are also compliant in administering the care required. Alternative solutions to a problem may be needed. It is unrealistic that an 80 yr old pensioner is expected to bath their Newfoundland dog once a week with medicated shampoo!

The influencing factors should always be considered when creating the care plan for the animal and adjustments made appropriately.

References

- Aggleton & Chalmers (2000) 2nd ed Nursing Models & Nursing Practice. Palgrave
- Brown, C (2012) Experience of designing and implementing a care plan in the veterinary environment. *The Veterinary Nurse* 3(9): 534 - 542
- Davis, S (2006) Model Answer? Using nursing plans in veterinary Practice. *VNTimes* p4 vol 6 no.7
- Holland et al (2003) Applying the Roper-Logan-Tierney Model in Practice: Elements of Nursing. Churchill Livingstone
- Jeffery, A (2006) Moving Away from the medical model *VN Journal* vol.21 no.9 September 2006
- Joiner. T.2000 An holistic approach to nursing. *Veterinary Nursing* Volume 15 No 4 July 2000
- Kratz, C (1979) *The Nursing Process*. Balliere Tindall
- Lock, K (2011) Reflections on designing and implementing a nursing care plan *The Veterinary Nurse* 2(5): 272 - 277
- Orpet, H & Jeffery, A (2006) Moving towards a more holistic approach. *VNJournal* vol 26 no.5 May 2006
- Orpet, H & Welsh, P. (2011) *The Handbook of Veterinary Nursing*. Wiley-Blackwell, Oxfordshire
- Pearson, Vaughan & Fitzgerald (2004) *Nursing Models for Practice*. Butterworth-Heinemann
- Peate, I (2006) ed. *The compendium of Clinical Skills for student nurses*. Whurr.
- Roper, Logan, Tierney (2000) *The Roper, Logan and Tierney Model of Nursing*. Churchill Livingstone.
- Wager, C (2011) Case study: Critical reflection of implementing a nursing care plan for two hospitalised patients *The Veterinary Nurse* 2(6): 328 - 332
- Walsh, M (1997) *Models and Critical Pathways in Clinical Nursing: Conceptual Frameworks for Care Planning*. Balliere Tindall

口頭発表：7月7日 10:00 — 12:30（第1会場 1311）

座長：石岡克巳（日本獣医生命科学大学）

O-1 10:00

○花田道子¹ 宮野のり子²

¹ヤマザキ学園大学 ²動物病院 NORIKO

在宅看護への統合医療導入の有用性—看護計画の検討と動物看護師のかかわり方

O-2 10:10

○土井暢子 小野寺温 北澤実果 柳澤綾 加隈良枝

帝京科学大学大学院伴侶動物行動学研究室

動物看護師の保定技術に対する影響要因の検討

O-3 10:20

○山崎成菜美

エキゾチックペットクリニック

セキセイインコの人工飼料の給餌試験

O-4 10:30

○蒔田成美 小林真歩 小泉紫織 灘山真未 室伏利美 百田豊 松原孝子

日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科

飼い主が使い易い歯ブラシの提案に向けて—デンタルケアに対するアンケートと市販歯ブラシの使用調査

座長：藤永徹（帝京科学大学）

O-5 10:40

○小林真歩¹ 小泉紫織¹ 灘山真未¹ 蒔田成美¹ 室伏利美¹ 伊奈求² 船元謙二²

皆上大吾^{1, 2} 松原孝子¹

¹日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門 ²日本獣医生命科学大学付属動物医療センター

動物看護におけるサーモロジーの有用性の検討—手術中の犬における皮膚温と体温の変化に関する考察

O-6 10:50

○灘山真未¹ 小泉紫織¹ 小林真歩¹ 蒔田成美¹ 室伏利美¹ 武内皇子² 原田恭治³
松原孝子¹

¹日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科臨床部門 ²日本獣医生命科学大学附属動物医療センター

³日本獣医生命科学大学獣医学部獣医学科

犬の膝蓋骨脱臼の標準看護計画の作成に向けた検討

O-7 11:00

○山本健治 大島みなみ 大谷彩佳 梶本佳那 高木亜矢子

倉敷芸術科学大学生命科学部生命動物科学科

イヌの単独歩行における前後左右肢間での最大力積ゆらぎについて

休憩：11:10 — 11:20

座長：齋藤みちる（七里ガ浜ペットクリニック）

O-8 11:20

赤羽根和恵

ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科

動物看護学部におけるキャリア教育の重要性

O-9 11:30

○岡本勝寛¹ 中岡彩友美¹ 花園千沙¹ 神田鉄平^{1,2} 前田憲孝² 湯川尚一郎² 古本佳代²
村尾信義² 古川敏紀²

¹倉敷芸術科学大学動物薬物治療看護学研究室 ²同教育動物病院

診療統計からみる動物看護業務への要求

座長：多川政弘（帝京科学大学）

O-10 11:40

○榎本美沙子¹ 崎山法子¹ 上本知代子¹ 川畑翔¹ 西浦明日香¹ 西本奈穂¹ 杉浦紗代¹
藺田清香¹ 西景子¹ 下村ゆかり¹ 千麻奈美¹ 磯田拓也¹ 西浦実紀¹ 酒井智章²

¹王寺動物病院動物看護師 ²王寺動物病院獣医師

コンパートメント症候群の看護事例—症例から学んだ看護観の変化

O-11 11:50

○西景子¹ 崎山法子¹ 上本知代子¹ 川畑翔¹ 西浦明日香¹ 西本奈穂¹ 榎本美沙子¹
杉浦紗代¹ 藺田清香¹ 下村ゆかり¹ 千麻奈美¹ 磯田拓也¹ 西浦実紀¹ 酒井智章²

¹王寺動物病院動物看護師 ²王寺動物病院獣医師

コンパートメント症候群の看護事例—看護過程

O-12 12:00

○清水夕貴¹ 上田瑞紀¹ 安井美津紀¹ 神田鉄平^{1,2} 前田憲孝² 湯川尚一郎² 古本佳代²
村尾信義² 古川敏紀²

¹倉敷芸術科学大学動物薬物治療看護学研究室 ²同教育動物病院

麻酔記録の質に関する回顧的評価

O-13 12:10

○小泉紫織¹ 猪熊洋文² 松原孝子¹

¹日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門 ²キュティア老犬クリニック

犬の褥瘡看護～老犬介護施設の現状と褥瘡が発生している犬への体圧測定～

O-14 12:20

○室伏利美¹ 奥山けい² 高野美紀² 五十嵐綾乃² 澤田治美^{2,3} 弥吉直子^{2,3} 藤田道郎^{2,3}
松原孝子¹

¹日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科 ²日本獣医生命科学大学附属動物医療センター

³日本獣医生命科学大学獣医学科

放射線療法を受ける動物の入院看護の検討—スコティッシュ・フォールドの骨軟骨異形成症における標準看護計画の作成に向けて

ポスター発表：7月7日 10:00 — 17:00

コアタイム 11:30 — 12:30 (第2会場 1309, 1310)

座長：小野寺温 (帝京科学大学)

P-1

○川添敏弘 山川伊津子 赤羽根和恵 若尾義人

ヤマザキ学園大学

業務分析から見る動物看護師の意識 2

P-2

○松原孝子 百田豊 皆上大吾 石岡克己 左向敏紀

日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門

動物看護教育における入院看護実習のあり方の検討 (第1報) —入院動物看護実習の概要と学生の学び

P-3

○小嶋哲也¹ 齋藤みちる³ 石岡克己² 左向敏紀² 松原孝子²

¹みずほ台動物病院 ²日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門 ³七里ヶ浜ペットクリニック

動物看護教育における入院看護実習のあり方の検討 (第2報) —臨地実習教員の存在と効果的な指導方法について

P-4

○齋藤みちる¹ 小嶋哲也³ 石岡克己² 左向敏紀² 松原孝子²

¹七里ヶ浜ペットクリニック ²日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門 ³みずほ台動物病院

動物看護教育における入院看護実習のあり方の検討 (第3報) —動物看護学生の感じたヒヤリハット調査結果を分析

P-5

○草山太一 川村尚彦

帝京大学文学部心理学科

ひも引き協力課題を用いたラットの協力行動

P-6

○山川伊津子

ヤマザキ学園大学動物看護学部動物看護学科

イギリス・アメリカの動物看護の歴史からみる日本の動物看護の現状と報告

P-7

○古本佳代 北徳 古川敏紀

倉敷芸術科学大学生命科学部生命動物科学科

動物看護を考える

P-8

○三好哲平¹ 中山久仁子² 桜井富士朗²

¹みずほ台動物病院 ²帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

ネコの水分摂取量と尿量・尿比重との関係の研究

P-9

山谷悠介¹ ○小澤達哉² 伊藤亜也香² 井上愛冬² 渡辺隆之² 村上洋介²

¹国際ペット総合専門学校 ²帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

家庭飼育動物における子宮蓄膿症と化膿性疾患の細菌検索

P-10

中山久仁子 ○小林良輔 丸山愛 山下菜摘 秋山絵梨 阿部仁美 桜井富士朗

帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

歩行障害の高齢犬に対するコラーゲンペプチド投与が歩様に及ぼす影響

P-11

阿部仁美¹ ○辻田夏希¹ 長野早紀子¹ 村尾信義² 桜井富士朗¹

¹帝京科学大学生命環境部 ²倉敷芸術科学大学生命科学部

動物看護師教育における実習教材の開発

一般演題（口頭発表）要旨

7月7日（日） 10：00～12：30

第1会場 1311教室

在宅看護への統合医療導入の有用性 —看護計画の検討と動物看護師のかかわり方—

○花田 道子¹⁾ 宮野 のり子²⁾

1) ヤマザキ学園大学 2) 動物病院 NORIKO

演者らは、西洋医学と補完代替医療の両方の良い部分を駆使し、動物にとって最良のチーム医療となりうる統合医療を取り入れてきた。前者は科学的データに基づき局所への治療を目的とする事が多いが、後者には東洋医学などの伝統医学、マッサージのように手を用いる方法、ライフスタイル改善、食事療法、栄養療法、などいろいろな療法が含まれ、からだ全体を診て自然治癒力を促すという点で前者とは異なっている。したがって、両者を併せた統合医療は治療、QOL(Quality of Life)の向上と予防、健康維持の増進に寄与し、一生をケアして「良質な最期の時 QOD(Quality of Dying and Death)を動物、飼い主と共に迎えるための医療でもあるといえる。また、動物が入院した際のストレスを考えると、在宅のほうが早く良くなることも少なくない。さらに飼い主の医療への関心度の増加、動物および飼い主の高齢化に伴い、在宅看護の必要性和重要性も増してきた。そこで、我々の事例からその有用性を報告し、今後の課題を提供したい。

<目的および方法>

飼い主への啓蒙と指導を動物看護師と共に行うことによる在宅看護における治療効果と QOL の向上および健康管理（予知・予防）を目的として以下のことを実施した。

1) 飼い主を対象としたセミナーの開催：基礎知識の伝授（簡単な解剖学、病態生理と栄養学）

実技指導（食餌作製・サプリメント指導、シャンプー・マッサージ・温灸の手技指導）

2) 飼い主への個別指導：看護計画（動物の状態把握、飼い主のニーズと技量の把握、病院側の要望と可能性の提示）の立案と実施

<結果>

1) セミナーに出席してもらうことで病気の正しい理解と健康維持の大切さが伝授された。また飼い主同士のコミュニケーションがとられ、同病看護の情報交換の場を提供することによる孤立化防止ないし解消で飼い主の不安軽減がなされ、動物の QOL や病状の改善に好影響がみられた。

2) 看護計画は飼い主と病院側双方に無理のない範囲のものであった。電話による経過観察の情報も多くなり動物の状態の把握は良好になったが、その対応が煩雑となることもあった。

<考察>

在宅看護(Home Nursing)は獣医師、動物看護師、そして飼い主が信頼関係に基づいて協力し合うことで初めて良い結果が得られるものであるため、日頃のインフォームドコンセントにも十分な配慮が必要とされる。まず来院時には西洋医学的観点から動物に対しては的確な一般身体検査と血液、尿、糞便などの検査、必要に応じたレントゲンおよび超音波検査を行い、場合によっては、専門病院または大学等で受診したデータを持参してもらうことも考慮に入れておく。さらに、動物と飼い主の全体像の把握も忘れてはならない。そして飼い主の要望に沿うことである。

一般に往診は医療行為であるため獣医師が行うが、在宅看護となると獣医師の指導のもと、または内容によっては、動物看護師自ら考え飼い主のニーズに合わせた補完代替医療であれば行うことが出来ると思われるため、Co-Worker としてのモチベーションを上げることに貢献できるであろう。また、飼い主参加型在宅看護は飼い主の我が子を何とかしてあげたい気持ちと満足度に答えられることもある。しかし、今後の課題として、飼い主の要望が西洋医学の範疇である場合、動物看護師の看護行為と医療行為の法的な範囲の確立が必要であろうと思われる。

[参考文献]

- ・Orpet, Hilary. Handbook of Veterinary Nursing, 2nd Ed. (2011), Wiley-Blackwell, UK.
- ・花田道子、宮野のり子. 生涯を通して栄養療法を主とした統合医療を用いたボクサー犬の一例：ヤマザキ学園大学雑誌 (2013); 3号: 109-118

動物看護師の保定技術に対する影響要因の検討

○土井 暢子¹⁾ 小野寺 温¹⁾ 北澤 実果¹⁾ 柳澤 綾¹⁾ 加隈 良枝¹⁾

1) 帝京科学大学大学院 伴侶動物行動学研究室

【序論】

近年、獣医療の多様化と高度化に伴う社会的要求の高まりを受け、動物看護師の公的資格化が進められており、動物看護師の専門的知識と技術のさらなる向上が求められている。動物看護師が行う業務には主に、受付などの人とかかわる業務と、処置や入院などの動物とかかわる業務があり、後者は動物看護師に特有であるといえる。動物は人間のように自身の気持ちや状態を話すことはできず、その動物の心理状態や病態は主に行動に表れるため、動物看護師はそれらを読み取り、動物に過剰な負担をかけないような保定や処置の方法を判断する必要がある。また、動物による診療中の咬傷事故などの危険性を未然に防ぐためにも、動物看護師による動物の観察や適切な扱いに関する能力や技術の獲得は非常に重要である。そこで本研究では、動物看護師による動物の扱い、なかでも保定技術に影響する要因を検討するために、保定の失敗経験や保定に対する印象が、性別や学歴、資格の有無、動物飼育や勤務の経験などと関連するか検討することを目的として、動物病院に勤務する動物看護師を対象とする質問紙調査を実施した。

【方法】

対象は勤務歴5年目までの動物看護師58名(関東・中部地方)、2012年10月から12月にかけて質問紙の配布と回収を行った。質問項目は主として対象のプロフィール、動物の飼育経験、動物の保定の3つの項目から構成された。単純集計した後、関連性を調べるために独立性の検定を行った。

【結果と考察】

性別は女性、勤務年数は1~2年目まで、最終学歴は動物関連の学校出身が多く、動物看護師資格を取得し、それ以外のペット関連資格は取得していない人が多かった。性別、勤務年数、学歴、動物看護師資格の有無、動物看護師以外のペット関連資格の有無といった属性と保定の失敗回数との関連には有意な関連はみられなかった。また、動物の飼育経験はほぼ全員があると答えたため関連をみることはできなかった。保定のしやすさと動物の飼育経験には有意な関連はみられなかったが、イヌを保定しやすいとする回答者が多く、保定しにくい動物種はネコとその他では飼育経験があっても保定しにくいとする回答者が多くなっていた。本研究では、動物看護師の性別、学歴や資格、動物飼育や勤務の経験などは動物の保定の失敗や印象に関連しないことがわかった。しかし、対象のほとんどが動物病院で獣医師からの指導やアドバイスにより保定技術を学んでいたことから、現状の教育や資格だけでは保定技術を獲得するのに不十分であることが示唆された。また、ほぼすべての回答者が保定を失敗しており、自分自身などの人がケガを負っていることが多かったことから、「人への安全確保」ができていないことがわかった。そして、保定のしやすさは動物の飼育経験に関連がみられなかったが、イヌは保定しやすく、ネコやその他の動物は保定しにくいという回答が多く、保定しやすいとの回答が多かったイヌは保定する機会が多く、ネコは保定する機会が少ないことから保定のしやすさは保定する機会の多さが影響している可能性が示唆された。

セキセイインコの人工飼料の給餌試験

○山崎 成菜美¹⁾

1) エキゾチックペットクリニック

【はじめに】本邦におけるペットの飼鳥の多くは、従来からアワやヒエなどの種子が主食として給餌されており、手乗り目的で行われるヒナの挿し餌※1にも、アワ（アワ玉）が主に使用されている。しかしながら種子類はアミノ酸、ビタミンやミネラルなどが不均衡であるものが多く、ヒナの発育不良などの栄養学的問題が発生する可能性が高い。近年は栄養学的問題を考慮した人工飼料（ペレット）も数多く販売されているが、嗜好性が悪く、種子類から切り替えることが難しいとされている。そこで、我々はアワ玉とペレットの給餌によるヒナの全身状態および発育状態を比較した（発育試験）。そして、アワ玉による挿し餌を行っている幼鳥ならびに種子類を給餌していた成鳥に対するペレットへの切り替えが可能であるかを試みた（切り替え試験）。

【材料と方法】セキセイインコ15羽を供試動物とした。発育試験は約3週齢のヒナ6羽を使用し、アワ玉による挿し餌の3羽（Aグループ）とペレットによる挿し餌の3羽（Bグループ）の2群に分けた。Aグループはアワ玉をお湯（約40℃）でふやかして与え、Bグループはペレットをお湯でふやかして与えた。両グループともに挿し餌は1日に4回行い、ヒナの一般状態や排泄物の観察と体重測定を行った。

切り替え試験は、発育試験を行ったヒナ6羽（発育したため幼鳥と称す）と、種子類を給餌していた成鳥9羽を使用した。幼鳥のAグループは、アワ玉による挿し餌給餌開始から1週間後にお湯でふやかしたペレットを少量ずつ加え、採食するか観察した。発育の経過とともにペレットに加えるお湯の量を徐々に減らし、ふやかす時間を短くした。Bグループは、ペレットによる挿し餌給餌開始から1週間後にペレットに加えるお湯の量を徐々に減らし、ふやかす時間を短くした。両グループともに、最終的には乾燥したペレットを与え、一人餌※2への移行も試みた。一般状態や排泄物の観察、体重測定も発育試験と同様に行った。

種子類を給餌していた成鳥9羽は、種子類に乾燥したペレットを少量ずつ加え、問題なくペレットを採食するか観察した。採食する個体にはペレットを徐々に増量し、最終的にペレットのみを給餌した。

【結果】発育試験では、アワ玉給餌のAグループとペレット給餌のBグループの発育に相違はなく、両グループとも一般状態ならびに排泄物の状態は良好であった。切り替え試験では、幼鳥はすべてペレットを採食した（100%）が、種子類給餌の成鳥ではペレットに切り替えられたのは9羽中3羽であった（33%）。

【考察】発育試験で使用したペレットは、アワ玉と同等な発育状態を示した。そして、種子類を給餌していた成鳥をペレットへ切り替えることは難しいが、ヒナおよび幼鳥から与えることで容易に切り替えられ、その後も継続給餌することができると考えられた。

幼鳥からのペレットの給餌は、発育後の全身状態も良好に保つ可能性が高いと思われたが、今後中期～長期的な全身状態の観察のほか、血液検査などによる栄養状態の把握も必要であると考えた。

※1：挿し餌…人為的に与えられる餌またはその行為 ※2：一人餌…自立的な採食行為

飼い主が使い易い歯ブラシの提案に向けて ～デンタルケアに対するアンケートと市販歯ブラシの使用調査～

○蒔田 成美¹⁾ 小林 真歩¹⁾ 小泉 紫織¹⁾ 灘山 真未¹⁾ 室伏 利美¹⁾
百田 豊¹⁾ 松原 孝子¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科

【はじめに】犬のデンタルケアは、飼い主により行われる。近年デンタルケアの重要性が広まる一方で、現在家庭犬の約8割が歯周病予備軍であると言われている。市場のデンタルケア商品は多種多様であり、その中でも最も推奨されているものが歯ブラシである。歯ブラシを継続するには、飼い主はデンタルケアの重要性を認識し、適する歯ブラシの選択を行い、実施することが重要である。

動物看護師は飼い主の不安や疑問を聞く身近な存在の一人である。デンタルケアの場面では正しい知識と技術をもった動物看護師による、長期的に犬のデンタルケアを行えるような支援と使い易い歯ブラシの選択への援助が必要であると推測される。

そこで本研究では、デンタルケアにおける飼い主と動物看護師との関わりを調査するために獣医療関係者100名にアンケート調査を実施した。中でもそこに関わる動物看護師が実際に受けた相談内容、対象動物を把握することで今後のデンタルケアにおける動物看護師の役割を一考できた。

また同時に市販の歯ブラシを用いて、犬の歯周の状態と飼い主にとっての使い易さとは何かを調査し、使い易い歯ブラシの提案に向けての示唆を得ることができたのでここに報告する。

【材料と方法】Ⅰ．主に動物看護師を対象とした獣医療関係者100人に対し、デンタルケアについてのアンケートを作成。そこからデンタルケアに関わる動物看護師の背景や実際の飼い主からの相談内容等を調査し分析した。(20130307～20130424の期間に配布)

Ⅱ．市販の歯ブラシ商品を【A社(先端形態:ストレートカット、毛の長さ:0.8cm、ハンドル:18cm) B社(先端形態:ストレートカット、毛の長さ:0.5cm、ハンドル:10cm) C社(先端形態:360°、毛の長さ:0.4cm、ハンドル:15cm)】3つを用い、本学で飼育しているビーグル犬3頭を対象に本学科生40名が調査した。市販の商品1つにつき1頭を対象とし、1日1回、上下各1分ずつ犬に歯磨きを行った。また調査開始初日と最終日には獣医師による歯肉における腫れ・充血評価を行い、それをブラッシング効果の批評とした。(20130308～20130404)

【結果および考察】方法Ⅰの結果より、回答者の80%がデンタルケアについての相談を受けたことがあり、有効回答のうち29%が高齢犬を抱える飼い主からであった。また相談内容において最も多い項目が28%で歯磨き方法についてであった。方法Ⅱの結果より最も使用感(満足感)があり、被験者の評価が高い順はB社、A社、C社であったが、調査初日と最終日の歯肉評価において、歯肉の状態に改善が見られた箇所が多い順はA社、C社、B社であった。

これらの結果より、今後のデンタルケアにおける動物看護師の介入すべき点や犬と飼い主にとってよりよい歯ブラシ商品とは何かの示唆を得ることができた。

動物看護におけるサーモロジーの有用性の検討 ～手術中の犬における皮膚温と体温の変化に関する考察～

○小林 真歩¹⁾ 小泉 紫織¹⁾ 灘山 真未¹⁾ 蒔田 成美¹⁾ 室伏 利美¹⁾
伊奈 求²⁾ 船元 謙二²⁾ 皆上 大吾^{1) 2)} 松原 孝子¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科 臨床部門

2) 日本獣医生命科学大学附属動物医療センター

赤外線サーモグラフィは物体表面の温度分布を画像として表示するものであり、体表の温度異常を検出する生理機能検査であるといえる。非侵襲的で簡便に検査を行うことができ、反復検査を行っても身体に影響を及ぼさないため、経時的な温度変化を測定することも可能である。人医療では疼痛や炎症、血流障害、関節炎等の客観的評価法として疾患の補助診断、治療効果判定、経過観察等に活用されている。また人の看護研究において、サーモグラフィで高温を認めた創傷の部位が、肉眼的には判別できない炎症を示しており、予後予測の指標として有用性が高いことが示唆されている。

動物は人のように症状を自ら訴えることができないため、動物看護は主観的な情報が把握できず、状態の理解がしづらいという特徴がある。そのため動物の状態を客観的に評価する必要がある、その手段としてサーモグラフィを利用したいと考えた。

これまで人医療の研究では、手術中にサーモグラフィによる術部の表面温度が、術式によって体温(深部温)の動きを超えて大きく変動することが明らかになっている。このことは、一般的に行われている深部温のモニタリングのみでは、術部の表面温度の変化は捉えられないことを示しており、また術創部温度の低下は手術部位感染のリスクの予測につながると考えられる。しかしながら、動物では未だこのような研究は行われていない。

皮膚表面温度は、気温や湿度・日光・季節などの外的因子や、皮膚血流・皮下脂肪・年齢・性別など多くの内的因子に左右される。しかし、動物の場合は体表に被毛があり、人よりも立体的な曲面が多いという特徴がある。そこで今回、手術中の犬に対して、術部の表面温度をサーモグラフィにより経時的に測定し、体温との比較を行った。それにより、犬においても皮膚表面温度と体温の推移に差があるかどうかを考察し、人医療で活用されているサーモグラフィは、動物看護のアセスメント技術として有用であるかを検討したためここに報告する

犬の膝蓋骨脱臼の標準看護計画の作成に向けた検討

○灘山 真未¹⁾ 小泉 紫織¹⁾ 小林 真歩¹⁾ 蒔田 成美¹⁾ 室伏 利美¹⁾
武内 皇子²⁾ 原田 恭治³⁾ 松原 孝子¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 臨床部門

2) 日本獣医生命科学大学附属動物医療センター

3) 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医学科

はじめに

犬の膝蓋骨脱臼とは、人気犬種である小型犬に多く認められる疾患であり、すべての脱臼の約20%にみられる。疼痛、跛行そして変形性関節症を引き起こし、運動器障害を起こすため、QOLを低下させるが、治療が成功すれば正常な機能が回復する。そのため、その動物看護の役割は治療を行いながら日常生活に復帰、自立の獲得に向けて一端の援助を行うこととなり、個々の患者に応じて退院後のリハビリテーションまで含めた長期的な看護と飼い主との連携が必要となる。

しかし、膝蓋骨脱臼の症状は、その程度により無症状のものから正常な歩行が困難なものまで多岐に渡る。また、病因は先天性と後天性に分けられ、発症の要因は様々であり、罹患年齢も幅広い。さらに先天性の場合には両側性の膝蓋骨脱臼が認められることが多く、手術と保存療法を併用するなど、膝蓋骨脱臼には様々な症状・背景があるため、瞬時に看護計画を立てるのは困難である。そのため、標準看護計画を立案することにより、効率よく治療に沿った看護介入を行うことができると考える。

標準看護計画とは、病態にのみ視点をおいた看護計画のことをいい、標準看護計画の内容を、患者動物の状況に合わせて具体化することにより個別性のある看護計画になる。膝蓋骨脱臼のように症例数は多いが、症状・背景は様々である事例に有効的に使われると考えられる。

そこで、本大学附属動物医療センターにおいて学生が受け持った、膝蓋骨脱臼の手術を行った患者動物のカルテと学生の看護記録を分析し、術式や背景によって相違点はあるのか、また膝蓋骨脱臼に共通していることは何か分析した。その結果、標準看護計画の作成に向けた示唆を得たのでここに報告する。

I 研究材料と方法

1. 材料：入院看護実習において学生が受け持った2事例

1) パピヨン 4歳9ヶ月 両側性膝蓋骨内方脱臼 左右：滑車溝形成術

2) マルチーズ 1歳2ヶ月 両側性膝蓋骨内方脱臼 右：滑車溝形成術 左：保存療法

2. 方法：1) カルテと学生の看護記録をもとに入院時の記載されている内容をクリティカル・パスをもとに分類 2) 分類結果より2事例の経過を検討 3) 標準看護計画の作成

II 結果および考察

今回、記録の分類より、カルテには治療・食事をはじめとし、負重や患肢の様子が主に記載され、学生の看護計画には、患者動物の性格や行動、リハビリテーション時の患者動物の様子が主に記載されているのが分かった。これより、看護計画には患者動物の性格などの背景、治療・食事の記載欄、患肢の様子、患肢と健肢を比較する欄を設けるべきであると示唆した。

イヌの単独歩行における前後左右肢間での最大力積ゆらぎについて

○山本 健治¹⁾ 大島 みなみ¹⁾ 大谷 彩佳¹⁾ 梶本 佳那¹⁾ 高木 亜矢子¹⁾

1) 倉敷芸術科学大学 生命科学部 生命動物科学科

着想と予測

歩行に関わる疾患を有しないイヌの歩行においては、四肢にかかる床反圧の力積の大きさは、左右肢間でも前後肢間でも閾値以上には大きく乱れないと考えられる。この着想にもとづき可能な頭数のイヌの限定的な短い歩行に対して、それぞれの左右肢への力積の残差の最大値が求められる。

予想通り、左右の肢の間では平均値からの残差に極限値の存在することが確認される。また、前後肢の間でも、残差の極限値の存在を予想させる結果がもたらされる。この研究の結果、イヌの歩行検査に客観化の可能性が見出される。

制御とゆらぎ上限

単独で歩行させるイヌの四肢の裏にかかる床反圧分布は、細密な区画に割って調べられるので、一步ごとに圧力の最大値が採取される。歩行のために設置される床反圧センサシートの長さは2m弱で、その上を歩く中小型犬で12歩、大型犬でも6歩ほどのデータが得られ、解析に供される。

歩行とは、体が下方または前方へ向かって持つ運動の勢い、つまり運動量を、床反力の力積によってコントロールする営みである。静かな歩行では、床面に垂直な力の成分に関するデータが与えられるものと理解して差し支えない。厳密に言えば、床反圧には力の水平成分による影響も含まれるが、肢にかかる最大圧力の時間積分を左右肢間や前後肢間で比較する限りにおいては、有意なデータと理解される。

歩行させる犬種はミニチュア・ダックスフンドとシェットランド・シープドッグ、調べられる歩様はウォーク・アンブル・ペースおよびトロットである。

結果と考察

研究からもたらされる歩行ゆらぎの上限値を含めて、イヌの正常歩行の条件は次のように表現される。ゆらぎのうち、左右肢間については確定値に近づいたと考えられる。前後肢間についても指標の存在が確実視されるが、歩行加速度の影響が要検討とされる。

表 イヌの正常歩行の条件

1. 床からの力積で体をコントロールできている。(左右の力積ゆらぎは60%以内)
2. 踏み込み準備行動が認められる。
3. 正しい脚運びをしている。
4. 同じ肢の力積に中央値から大きく外れたものが繰り返して表れない。

動物看護学部におけるキャリア教育の重要性

赤羽根 和恵¹⁾

1) ヤマザキ学園大学 動物看護学部 動物看護学科

1. 本研究の目的

2009年、文部科学省が高等教育機関でのキャリア教育と初等・中等教育との接続を明文化し5年が経った。各大学ではキャリアセンターの設置、キャリア科目の配備と充実を行い、近年低迷していた就職率の改善、募集にも効果が出ている。そこで大きな特色として打ち出す大学が増える傾向にあり、今後ますますキャリア教育は盛んになると思われる。これら一連の動きは、近年の長引く経済不況、就職率の低下、早期離職率が高いことによる。

わが国初の動物看護学部として本学が開学し完成年度を迎えた。すでに企業に就職が決まった学生もいるが、学生の大半が動物病院で動物看護師として就業する見込みである。職業専門教育を目的とする単科大学では、実習を含む充実した専門教育が必須である。しかし今日の社会情勢を鑑みると、早期離職を避けるために揺るぎない職業観を持つようさらなる支援が必要である。

そこで本報告では、学生にとって有効なキャリア教育とは何か、「キャリアマネジメント入門」受講生に対してアンケート調査を実施、要望を明らかにした。その上で動物病院とペット関連企業への調査および「中小企業白書」、「中小企業景況調査」を用い、新卒採用、教育、キャリア形成など人材マネジメントと、経営者が大学に求めることを明らかにし、今後必要なキャリア教育を明示する。本研究は労働市場における労使共に有効なマッチング、長期的な就業へと繋がり、動物看護師のキャリア形成について有効であると考えられる。

2. 調査の概要

実施した調査の概要は以下の通りである。

1. 受講生へのアンケート調査：2011、2012年度後期選択科目「キャリアマネジメント入門」講義内で実施（有効回答率99.3%）
2. 動物病院へのアンケート調査：2011年4月郵送、都内動物病院（有効回答率9.2%）
3. ペット関連企業へのアンケートおよびインタビュー調査：2012年郵送、9月インタビュー

3. 調査結果の概要

学生は入学時に動物看護師を目指しているが、在学中に適性について迷いが生じる場合も多い。また大学に求めるキャリア教育は、履歴書やエントリーシートの書き方、面接試験対策など就職支援が主であるが、履歴書・エントリーシートは大学4年間をいかに過ごしたかを記入するものである。そこで1年次よりキャリア教育を実施し、早期からキャリア形成を視野に入れた動物看護師としての職業観の明確化が重要である。実際に企業が求める人材は、「学生時代に何かに打ち込んだ経験」、「学業以外に取り組んでいること」である。また動物病院の採用では、「人柄」、「コミュニケーション能力」、「責任感」、「一般常識」などいずれも専門教育以外が求められている。そこで学生が自らの将来を主体的に考え、自己のキャリア形成を行うためのキャリア支援は、全学的な早期からの一貫したキャリア教育への取り組みと、基礎学力の強化であるといえよう。

診療統計からみる動物看護業務への要求

○岡本 勝寛¹⁾ 中岡 彩友美¹⁾ 花園 千沙¹⁾ 神田 鉄平^{1) 2)}
前田 憲孝²⁾ 湯川 尚一郎²⁾ 古本 佳代²⁾ 村尾 信義²⁾ 古川 敏紀²⁾

1) 倉敷芸術科学大学 動物薬物治療看護学研究室 2) 同 教育動物病院

【背景および目的】我が国における飼育動物診療施設、中でも伴侶動物を診療対象の中心としたいわゆる動物病院は多様化の一途をたどっており、各施設が動物看護師に求める知識や技術は、獣医師と同様に、施設の方針や性格によって大きく異なっている。そこで本研究では、一例として、倉敷芸術科学大学教育動物病院（以下、当施設）における動物看護業務への潜在的な要求を明らかにすることを目的に診療統計を実施し、診療業務内容の分析を行った。

【調査の対象および方法】2008年4月から2013年3月までに当施設において作成された診療記録373件を対象とし、動物種、年齢、性別、体重およびBCS、飼育環境、狂犬病予防接種（イヌのみ）、その他予防接種、フィラリア予防（イヌのみ）、来院目的および回数、診療内容、疾病分類および診断名のそれぞれについて集計を実施した。なお、本研究における疾病分類は、動物看護業務への反映を目的とすることから、全国動物保健看護系大学協会による「動物看護学教育標準カリキュラム」を参考に、機能障害に基づいて行った。

【結果および考察】当施設への来院動物は全体の8割以上をイヌが占め、1件を除いて残りはすべてネコであった。現在までに、当施設に来院した動物種の傾向を踏まえると、いわゆるエキゾチックアニマル等への対応強化よりも、まずはイヌおよびネコを対象とした業務に注力すべきであると考えられた。来院したイヌのなかで、最多となった犬種はラブラドル・レトリバーであり、次いでミニチュアダックス・フンドとなった。この2犬種が全体の約半数を占めており、現在、飼養頭数が多いとされている小型犬ばかりでなく、大型犬を含む様々な犬種に対応した動物看護を提供できることが重要であると考えられた。来院目的および回数をみると、イヌ、ネコ共に単回来院している症例の方が複数回来院に比べて多く（イヌ78.2%、ネコ56.1%）、イヌでは検査のみを目的として来院している場合が単回来院した症例の82.5%を占めていた。これは当施設が二次診療施設として機能していることを示しており、この様な施設では、長期間にわたる動物のケアや飼い主への指導よりも、比較的集中した期間に必要な動物看護技術に重きをおく必要があると考えられた。例えば、画像検査のうちCT検査がイヌで28.0%、ネコでは15.2%となっており、これらは当施設において比較的大きな部分を占めている。動物のCT検査は麻酔あるいは鎮静の看視、撮影時のポジショニングおよびヒトと動物の安全確保といった動物看護師の関わる業務が短時間に集中する。結果から、当施設ではこれらに対応できる動物看護師が欠かせない状況にあることが示された。また、様々な機能障害を伴った動物が来院するなかで、神経・運動機能障害が全体の約1割を占め、最多となった。この87.8%が椎間板ヘルニアであったことを踏まえると、椎間板ヘルニアに伴う運動機能障害を持つ動物に対するケア、術後のリハビリテーション指導等について、当施設の動物看護師は知識と技術の向上を一層期待されるものである。

【まとめ】診療統計を実施し、施設の性格や業務内容の分析を行うことで、従事する動物看護師に何が求められているか、また何を学習・習得することが施設の発展、ひいては動物の健康に貢献することになるのかを示唆することが可能であった。

コンパートメント症候群の看護事例 ～症例から学んだ看護観の変化～

○榎本 美沙子¹⁾ 崎山 法子¹⁾ 上本 知代子¹⁾ 川畑 翔¹⁾ 西浦 明日香¹⁾
西本 奈穂¹⁾ 杉浦 紗代¹⁾ 藺田 清香¹⁾ 西 景子¹⁾ 下村 ゆかり¹⁾
千麻 奈美¹⁾ 磯田 拓也¹⁾ 西浦 実紀¹⁾ 酒井 智章²⁾

1) 王寺動物病院 動物看護師 2) 獣医師

《はじめに》私は患者動物とその家族である飼主に寄り添った看護を行う事を目標にしていましたが、私自身は飼主になった経験がなく、どのような気持ちで飼主が患者動物と歴史を刻んでいるのか、また寄り添われる看護がどういうものか理解できず、日々の看護や業務で寄り添った看護を実践することはできずにいました。本症例は寄り添った看護を実践させ、看護本来の意味を学び、看護を行うことへの自信につなげる事ができたので経緯より考察します。

《症例》骨盤骨折、尿道断裂した3～4カ月、未去勢の保護猫です。膀胱皮膚造瘻術を行い、創傷管理と栄養管理、飼主への看護介入を行い完治に至りました。

《経緯》飼主は過去に保護猫に何もしてやれず後悔していた事を本症例には何かしてやりたいという強い気持ちがありました。日々の状況の変化が激しく、医療従事者でさえ予後について幾度となく良い結果をイメージできずにいました。状況を改善しようと考え、緊急院内カンファレンスを実施しましたが、しかし、飼主に現状を思い知らせ、過酷な治療を選択するか、安楽死を受け止めるかという最悪の結論を導いてしまいました。飼主が現状説明を聞いて、動物に目を向けた時、動物が飼主の顔を見て鳴きました。その時飼主は保護したことや治療を決断した事の責任を取り1人で看護することを決意しました。私は飼主の決意を目の当たりにし目標としていた看護から一番遠い所で世話をしていた事に気付きました。私は治療を行うことさえ残酷と想いながら、看護技術が追いつかず苦痛しか与えられていないと感じざるを得ませんでした。さらには看護を諦めてしまっていた事を痛感しました。その後飼主との関わる時間を大切に、治癒した暁に希望を捨てずに頑張りぬいた動物と飼主に表彰状を送りました。

《考察》医療従事者であれば、動物が亡くなる辛さを知っており、過酷な治療よりも安楽死のほうがよいのではないかと考える事もあります。生死に関わるような状態の症例を前に、自身の責任において自信を持って何を提案していいかわからず、カンファレンスでも発言できなくなってしまいました。十分な看護介入が出来ていないという罪悪感を飼主と関わることで打ち消し、それが使命感に変わるころには動物に対して飼主と同様の愛情を持つ事が出来るようになりました。そして、動物を介し、飼主と動物看護師にこの動物を回復まで支える連帯感が生まれ、自分の全てを差し置いても優先させたいと感じるまでに関わる事ができました。様々な患者動物と飼主がいるなかで本症例に寄り添う事は体力的にも精神的にも厳しいことでしたが、よりよい看護を実践しようという仲間もいたからこそ、症例に寄り添い続けられたと思います。また、完治したときに渡した表彰状には私達への寄り添った看護に対する達成感をも意味していたと考えられます。《おわりに》本症例に行った看護過程での挫折や絶望に立ち向かう事は動物の命を救いたいと思うヒトのエゴかもしれませんが、ですがそのエゴに向き合うという形で明日からの看護に変えていくことが重要だと思います。この症例に出会ったからこそ、動物の生命力と回復を信じる事が出来るようになったと思います。どの様な状況でも、動物と飼主に愛情をもって看護介入を行い、全力でサポートする事で寄り添う看護としていきたいです。

コンパートメント症候群の看護事例 ～看護過程～

○西景子¹⁾ 崎山法子¹⁾ 上本知代子¹⁾ 川畑翔¹⁾ 西浦明日香¹⁾ 西本奈穂¹⁾ 榎本美沙子¹⁾
杉浦紗代¹⁾ 藪田清香¹⁾ 下村ゆかり¹⁾ 千麻奈美¹⁾ 磯田拓也¹⁾ 西浦実紀¹⁾ 酒井智章²⁾

1) 王寺動物病院 動物看護師 2) 獣医師

【はじめに】コンパートメント症候群は交通事故などによる大きな衝撃で内部に出血が起こると筋区画の内圧が上昇し、細動脈を圧迫・閉塞させ、筋肉や神経に血液が送れなくなり筋・腱・神経組織は壊死状態となることである。壊死のピークを迎えるまでは状態が日々変化し、その後、停滞状態が続き、改善に至るまでの経過が長期にわたる。この遭遇することの少ない症例でより良い創傷のケアと、十分な看護介入を行い治癒することができたのでここに報告する。

【症例および看護】後肢麻痺状態で保護され来院。3～4カ月(推定)でBW1.9kgの未去勢の猫。骨盤の複雑骨折、尿道断裂と診断され、様々な状況から安楽死をすすめられたが保護主は迷っていた。翌日に再来院を指示し、安楽死や手術、術後の生活について看護介入を含め再度十分なインフォームドコンセントを行なった上で、保護主は飼主として「生かす」ことを決断し、膀胱皮膚造瘻手術を行うことになった。この手術は問題なく終了したが、のちにコンパートメント症候群が現れた。膀胱皮膚造瘻術後3日目、肛門付近に皮膚の壊死裂開が認められた。術後4日目より創部の管理を実施した。日々皮膚の壊死部をデブライトメント、洗浄、温熱治療を行い、湿潤環境を保てるよう臀部に包帯を施した。創傷の状態により包帯交換を1日3回～3日に1回の間で変動させ87日間管理し、術後91日目皮膚形成術と同時に去勢手術を行い治癒に至った。栄養管理は高カロリーで、便量が少なく、包帯により複雑骨折のまま固定せざるをえなかった骨盤を通れる軟便である必要に加え、水分量、繊維量と与えやすさを考えA/D缶と、さらにカロリーが摂取できるよう幼猫用粉ミルクを混合した。自力摂取も試みたが、体重の減少と創傷の癒合停滞が見られたため、手術へ向けて全量の食餌介助を飼主に指導した。

【考察】創傷管理は日々状態が変化するため十分な観察を行い、その都度ドレッシング材や保護材を使用し臀部に包帯を巻く事で湿潤環境を保つことができた。また排泄物での汚染をさけるために様々な工夫を凝らす事で包帯を維持することができた。栄養管理は長期の食餌介助で動物と飼主にストレスを与えた。自力摂取では回復に必要なエネルギーを十分に摂取できなかったが、十分な栄養管理は皮膚の形成スピードを増進した事から、創傷管理における栄養の重要性も改めて認識した。医療従事者はコンパートメント症候群が現れ、壊死進行の速さに死を容易に想像でき絶望的だった。しかし、飼主はこの動物を「生かす」と決断した想いと動物の回復を信じていた。そして私達に飼主が決断したすべてを全力でサポートする決意をさせてくれた。医療従事者である私達でさえ向き合う事が厳しい症例であったが、飼主は精神的、経済的な負担を強いたなか諦めず、動物看護師と飼主が想いや状況を分かち合うことで、動物も過酷な治療に耐えて治癒したと考える。

【まとめ】この時は目の前の看護に追われ気付けなかったが、創傷管理、栄養管理、看護介入のいずれの関わりが欠けても治癒できなかったと思うと、今回は私達の理想とする看護が実現できたと思う。一つとして同じ症例はないが、そこに関わる全ての人と動物と共に治療へ臨む過程を大切にしながら、この症例で得たものを今後の症例に引き継ぎ、より良い看護と介入を目指していきたいと思う。

麻酔記録の質に関する回顧的評価

○清水 夕貴¹⁾ 上田 瑞紀¹⁾ 安井 美津紀¹⁾ 神田 鉄平^{1) 2)}
前田 憲孝²⁾ 湯川 尚一郎²⁾ 古本 佳代²⁾ 村尾 信義²⁾ 古川 敏紀²⁾

1) 倉敷芸術科学大学 動物薬物治療看護学研究室 2) 同 教育動物病院

【背景および目的】2012年に獣医麻酔外科学会が示した「犬および猫の臨床例に安全な全身麻酔を行うためのモニタリング指針」は、麻酔記録の作成を推奨すると共に、記録を行う麻酔看視係を動物看護師が務める可能性について示唆している。これによって、適切な麻酔看視と正確な麻酔記録の作成は動物看護師にとって重要な役割の一つであることが改めて示された。そこで、本研究では、動物看護師が正確な麻酔記録を作成するために必要な技術や知識、意識、環境条件について検討することを目的として、倉敷芸術科学大学教育動物病院（以下、当施設）において動物看護師および動物看護学生が作成した麻酔・鎮静記録を回顧的に評価、検討した。

【評価の対象および方法】当施設において2007年4月から2013年3月までに実施された麻酔処置および鎮静処置についての看視記録307件（麻酔221件および鎮静86件）を集計の対象とした。各記録における基本情報（日付、ID、名前、種類、体重、性別）、実施状況（導入時間、抜管時間、総麻酔時間、薬物投与、麻酔科医・術者・記録係）、心拍数、血圧、酸素飽和度、呼吸回数、麻酔濃度、炭酸ガス濃度、体温、気道内圧、呼気・吸気時間、酸素流量、輸液量、尿量のそれぞれの項目について予め作成した基準に従って評価・採点し、満点が100点となるように合計点数を算出した。麻酔および鎮静のどちらの看視記録も同様に評価し、集計を別に行った。

【結果】（麻酔）2008年以前は基本情報や実施状況に加え、各看視項目についても十分な記載がされていないものが多く、平均合計点数が2007年は39.5点、2008年は50.9点と低くなった。2009年以降には各項目の記載に改善が認められ、2009年には平均合計点が74.1点となり、2010年に76.5点、2011年に74.1点と一定する傾向が見られた。その後、2012年には平均合計点が77.7点と更に改善する傾向を示し、2013年に入ってから80点から98点という高い点数で推移してきた。（鎮静）2007年は記録用紙こそ作成されているが記載がほとんどされておらず、平均合計点が10.0点にとどまった。2008年以降は改善される傾向にこそあったが、それでも平均合計点は麻酔の場合に比べて低く、2008年から2012年までの各年における平均合計点はそれぞれ25.4点、23.8点、28.3点、32.6点、35.9点となった。麻酔記録では著しい改善が見られ始めた2013年に入ってから合計点も33点から53点の低い範囲を超えることはなかった。

【考察】2008年以前は当施設における診療体制が十分に整っておらず、麻酔看視係を適切に配置できていなかったことが、平均点を大きく下げた原因であると考えられた。以降2012年までの平均点は、改善が進むものの、麻酔看視係の知識や経験の不足から麻酔記録の意義が十分に理解されず、形骸化する傾向を示すものであった。その後、麻酔看視に関する教育の充実に伴って知識や理解の不足が改善され、麻酔担当獣医師との連携がより積極的に進められた結果、平均点が更に改善するに至ったと考えられた。その一方、鎮静看視記録の評価が改善されなかったのは、鎮静処置が要求される状況に原因があるのではないかと考えられた。これまでの結果と考察から、作成する麻酔記録の質を担保するためには、適切な麻酔看視係の配置、麻酔看視に関する十分な教育と学習、麻酔担当獣医師との密接な連携が重要な要素となることが示唆された。

犬の褥瘡看護 ～老犬介護施設の現状と褥瘡が発生している犬への体圧測定～

○小泉 紫織¹⁾ 猪熊 洋文²⁾ 松原 孝子¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科 臨床部門

2) キュティア老犬クリニック

【はじめに】

褥瘡とは、局所の物理的、持続的圧迫やずれといった外力と、それを助長する内的因子によって組織の末梢血管が閉鎖し、壊死を起こす病態である。一度褥瘡が形成されると治療は長期に及ぶので、褥瘡を発生させないように予防することは、褥瘡の看護において重要な課題である。

近年、獣医療の発展や、犬の室内飼育の増加など飼育者の意識の変化により、犬の高齢化が進んでいる。飼育されている犬の約半数が、一般に高齢期と言われている7歳以上となり、老犬の介護を専門とした施設も存在している。高齢犬の中には寝たきりになってしまい、褥瘡が発症する現状がある。寝たきりの状態であると骨周囲の筋肉を支えることができず、骨が直接圧力を受けると、持続的な圧迫を余儀なくされるので、骨と皮膚表層の間の軟部組織の血流を低下、あるいは停止させる。血流障害が一定時間継続される事は、褥瘡発生の要因の一つとされる。

2012年、小暮らが褥瘡予防の視点から、全身麻酔下での側臥位の犬の体圧に着目した研究を行った。その結果、体圧が高値を示す部位が明らかにされ、犬においても一定時間同一体位を取ることが褥瘡発生リスクを高めることを体圧の側面から示唆された。しかしながら、実際に寝たきりで褥瘡を持つ犬の体圧の測定を行った研究はない。今回老犬介護を専門に行っている動物病院に協力を得て、来院する犬のうち寝たきりになっている犬の割合、褥瘡が発生している犬の割合を調査し、そして実際に寝たきりで褥瘡が発生している犬の体圧値の測定を行った。その結果看護の示唆が得られたのでここに報告する。

【研究方法】

1、高齢犬の現状調査

- 1) 対象動物：老犬介護施設Aに来院している犬42事例(2013年5月現在)
- 2) 研究方法：カルテ情報より利用している犬の年齢、体重、性別、褥瘡の有無を調査

2、寝たきりで褥瘡が発生している犬の体圧測定

- 1) 対象動物：寝たきりで褥瘡が発生している犬1事例(16歳、雄、柴犬、BCS 1/5)
- 2) 研究方法：①側臥位の体圧を測定
②側臥位の状態で普段使用している減圧目的のマットを用いた場合の体圧測定
- 3) 測定用具：タクトイルセンサーBIG-MAT(ニッタ)
- 4) 分析方法：測定後、各測定値で高値を示した部位を検討し、各部位の平均圧力を算出した。

放射線療法を受ける動物の入院看護の検討 ～スコティッシュ・フォールドの骨軟骨異形成症における 標準看護計画の作成に向けて～

○室伏 利美¹⁾ 奥山 けい²⁾ 高野 美紀²⁾ 五十嵐 綾乃²⁾
澤田 治美^{2) 3)} 弥吉 直子^{2) 3)} 藤田 道郎^{2) 3)} 松原 孝子¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科

2) 日本獣医生命科学大学附属動物医療センター

3) 日本獣医生命科学大学 獣医学科

はじめに

放射線療法は、外科手術や化学療法と並ぶがん治療3本柱の一つである。局所治療であり全身への有害事象が少ないことから治療適応が広く、また組織の形態や機能を温存させながら治療でき、患者のQOLを保持できる治療法として今後の更なる発展が期待されている。しかし、獣医療での歴史は浅く治療効果や予後の確立は不明確な部分が多い。また、動物看護師の役割における研究も少ないのが現状である。2012年に中山らは放射線療法を受ける患者動物の現状把握と看護記録の分析を行い、通院照射での患者動物に対し記録用紙を用いたことにより患者動物の個別性と飼い主に対してより看護介入ができたことを示唆した。しかしながら、本学附属動物医療センターでの放射線治療は、通院照射・入院照射そして入院照射であるが週末のみ一時帰宅をする方法がある。入院照射は一週間のうちで数回照射し、毎回全身麻酔をかけるため照射時はもちろん、入院生活の場面での看護介入は重要であると推測されるが放射線療法を受ける患者動物の入院看護についての報告はない。

本研究では放射線療法を受ける入院患者動物に視点を置き、痛みを伴うとされるスコティッシュ・フォールドの骨軟骨異形成症の事例に特化した動物看護を考える。カルテから一貫性のある動物看護を統一化し、標準看護計画に向けて考察したのでここに報告する。

I. 材料と方法

1. 対象動物：本学附属動物医療センターにおいて骨軟骨異形成症と診断され、放射線療法を受ける入院患者動物スコティッシュ・フォールド3事例(8歳2ヶ月去勢雄、3歳10か月去勢雄、3歳7ヶ月避妊雌)

2. 分析方法：クリティカル・パスを用いてカルテ、照射における看護記録および入院看護記録から患者動物の基本情報、照射情報、疾患の経過等を分析する。また、患者動物における関連図を作成し個別性をふまえた上で、観察項目を分析する。

II. 結果および考察

カルテ及び照射における看護記録には、骨軟骨異形成症に特異的な症状や疼痛の有無、治療計画や注意事項等が記載され照射における情報に一貫性があった。しかし、入院生活での患者動物の様子や創部の状態については経時的で一貫性のある情報が少ない。患者動物が最良の状態では放射線療法を受けられるよう標準看護計画に加え個別性を意識し、入院生活における観察項目の検討が必要であると考えられる。

動物にもコラーゲン

nippi 株式会社 **ニッピ**

〒120-8601 東京都足立区千住緑町1-1-1

<http://www.nippi-inc.co.jp>

手で切れるバンテージ、
ペットフレックス
PetFlex に新柄登場!

NEW!

サファリパック
**SAFARI
PACK!**

ゼブラパック
**ZEBRA
PACK!**



ゼブラ レオパード タイガー ジラフ



オレンジ ピンク グリーン イエロー



ペットフレックス

PetFlex

手で切れるバンテージ



ANDOVER

製造販売元
(輸入販売元)



株式会社 **キリカン洋行**

☎03-3457-0128 FAX 03-3457-9669

〒105-0014 東京都港区芝2-10-4 電巧社ビル www.kirikan.com

一般演題（ポスター発表）要旨

7月7日（日） 10：00～12：30
コアタイム：7日（日） 11：30～12：30

第2会場 1310 教室
1309 教室

業務分析から見る動物看護師の意識 2

○川添 敏弘¹⁾ 山川 伊津子¹⁾ 赤羽根 和恵¹⁾ 若尾 義人¹⁾

1) ヤマザキ学園大学

平成 24 年 2 月に資格の統一化を目指し、動物看護師資格の公的資格へ向けての第 1 回統一試験が実施された。また、今後の高位平準化に向けて、教育機関や養成校における共通カリキュラムの整備が進んでいる。さらに、国家資格を目指す専門職種として業務指針や倫理綱領等を確立し、動物看護師としての業務の標準化などが進められている。そこで、動物医療の現場でどのような業務が実施・達成されているかの実態調査に基づく分析が必要であると考え、動物病院を無作為に抽出し動物看護師に対して業務に関するアンケート調査を平成 23 年度に実施した。

調査は一都六県 300 病院を対象に郵送法で実施し、57 病院から回答を得て、56 人分を有効回答とした。23 年度の結果報告を協力いただいた動物病院へ郵送した際、再度、アンケートを依頼し、23 病院 23 名より回答を得た。また、平成 24 年度の動物看護学会開催時に、追加データとして新たに 12 人分を集めた。平成 23 年度分に関しては、すでにその概要と結果の報告を行った（第 21 回動物看護学会ポスター発表）。調査内容は、動物看護師の日常業務をⅠ受付業務、Ⅱ診察室および処置室での業務、Ⅲ入院室での業務、Ⅳ検査室での業務、Ⅴ手術関連業務、Ⅵ飼い主対応、Ⅶ病院経営その他の業務の 6 項目にまず大別し、その中で細目を作り、全体として 56 項目に分類した。さらに、それぞれの項目ごとに「業務実施度」だけでなく、その業務に対する各動物看護師の「業務重視度」と「実行した業務に対する自己評価」を加え、5 段階での評価を行った。

今回は、追加データを含め、それぞれの評定を統計的に分析した。それにより、業務を重視しているにも関わらず実施度が低いものなどを明らかにすることができた。これらの結果は、動物看護職として必要な知識や技術を明確にし、今後の教育機関や養成校における動物看護師育成の課題の一部示していると考えられた。

動物看護師は、今後、専門職として社会的認知を得ていく必要がある。さらに、公的資格制度を確立するためには、動物看護師ひとりひとりの意識を高めていく必要もある。それらに対して、現場で働く動物看護師の業務に対する意識を把握し、そこから見える問題についての改善につなげることが必要だと感じている。今回の調査では、それらを踏まえて、現役の動物看護師の各業務に対する意識が読み取れる追加結果を得て統計的な分析をすることで、現在抱えている問題の一部を明らかにできたと考えられた。

動物看護教育における入院看護実習のあり方の検討（第1報） ～入院動物看護実習の概要と学生の学び～

○松原 孝子¹⁾ 百田 豊¹⁾ 皆上 大吾¹⁾ 石岡 克己¹⁾ 左向 敏紀¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門

はじめに

看護教育における臨地実習の意義は、実際の看護ケアを通して学生の体験としての学びが得られ、その体験を通して自己理解と対象の理解を深めることにあると言われている。そして、看護の対象について「看護過程の展開」は、臨地実習における不可欠な内容となる。さらに、看護の実践を体験するという事は、未知の授業形態であることを認識する必要がある。学内では学べない学習（知識、技術、態度を含めて）であるからこそ、その実習におけるどのような教授活動がよって、その学びが得られるのか、教育デザインは重要な研究課題である。

我が国における動物看護教育においては、現在、動物保健看護教育モデル・コア・カリキュラムを策定し公開したところである。なかでも、この内容に準拠した臨地実習等は、これから検討すべき課題である。

そこで、本大学医療センター実習において、見学や部分的な関わりにおいてのみの実習より、受持ち患者動物を持つことで、情報収集から個別性のある看護実践までの動物看護を理解することが出来ることを目的に、4日間の入院看護動物実習として実施した。その結果、獣医保健看護教育における動物看護過程の習得を目指す臨地実習のあり方の示唆を得たので、今回の入院動物看護実習の概要と共に報告する。

1. 実習方法および実習指導体制

- 1) 獣医保健看護学科3年生医療センター実習科目履修者77名を1グループ6名から8名12グループに編成し進められた。(7グループ：4日間 5グループ：3日間の実習うち5グループは3日間の実習となった)
- 2) 実習学生2名ないし3名に1例の患者動物を受け持ち、動物看護実践を行った。また、グループ全体の指導者として動物看護師である実習講師と教員が行った。
- 3) 実習手引きを学生用と指導者用を作成し事前に提示した。
- 4) 実習記録用紙は、学ぶ内容に応じて準備し提示した。
- 5) 指導体制は、実習講師は3名おり、ローテーションで2名担当することとした

2. 研究方法

- 1) 実習評価表（5段階評価）を集計分析
①学生自己評価 ②実習日数による評価の違い
- 2) 実習感想レポート（自由記載）の集計分析：自由記載
- 3) 実習アンケートの集計分析

これらの内容を分析した結果より、今後獣医保健看護教育における動物看護過程の習得を目指す臨地実習のあり方を検討した。

動物看護教育における入院看護実習のあり方の検討（第2報） ～臨地実習教員の存在と効果的な指導方法について～

○小嶋哲也¹⁾ 齋藤みちる³⁾ 石岡克己²⁾ 左向敏紀²⁾ 松原孝子²⁾

1) みずほ台動物病院 2) 日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門

3) 七里ヶ浜ペットクリニック

はじめに

看護教育者は、さまざまなことを考慮して実践学習活動（臨地実習）を準備しなくてはならない。つまり、臨床の現場に入っていき学生と受け入れるスタッフの準備を整えていくのである。そのため、臨地実習の教育に関わる者の役割と責任は研究すべき課題である。

そして、臨床実践能力は優秀な教員に必須の要件と言われている。また、この臨床実践能力には、教育に関わる実践領域に関する理論的知識と卓越した臨床のスキルや判断力が含まれる。つまり、学術的な教育と臨床経験が組み合わさることによって、有能な実践教育の指導者に不可欠な要件と考えられている。

しかしながら、本学では、動物看護教育における入院看護実習を一昨年より導入しているが、臨地実習教員は、臨床経験がある動物看護師と大学院生を条件としている。実習の内容等についての共通認識はあるものの、教育に関する学習をしてきた者ではない。そのため、臨地実習教員の発言や関わり方が、学生の学びにどのような影響を与えるかの明らかにする必要がある。

そこで、今回、2年間の入院動物看護実習における実習指導に対するアンケートを分析し、実習指導者の言動が学生の学びにどのような影響を与えるかを明らかにし、今後の入院動物看護実習における実習指導方法の示唆を得る事を目的とした。

1. 研究方法 1) 対象：N大学獣医保健看護学科 3年生医療センター実習科目履修者で2011年度85名、2012年度79名。2) 方法：実習最終日に実習指導者に対しアンケート調査：①指導者の言葉や態度で励まされて実習に臨むことができた体験があったか ②「ある」と回答した内容について実習指導者の指導行動分析

2. 結果および考察 指導者の言葉や態度で励まされて実習に臨むことができた体験があったかについては、2011年度に「ある」と回答したのが72%、2012年度に「ある」と回答したのが89%であった。「ある」と回答した内容について、実習指導者の指導行動を分析した。2年間共に、緊張感の緩和が半数近くを占めていた。また、2011年度に比べ、2012年度は自己啓発の促進の項目が10%増えていた。実習指導者に対するアンケート調査を行った結果、学生は慣れない環境で、強い緊張感を持って実習に臨んでおり、実習指導者が関わることで学生は緊張感を緩和させ実習に臨むことができたと考えられる。また、2年目は、全て現職の動物看護師が実習指導者として関わることで、学生は、より自分が行った看護や観察内容について振り返り、主体的な学びに繋がったのではないかと考えられた。しかし、技術の習得については十分な教授が出来ていない可能性があった。今後の課題としては、意識的に技術を教授する機会を作る必要があるということ。さらに、実習指導者も看護教育について自己学習し、実習指導に臨む必要があると考えられた。従って、学生の学習意欲や成長を促すうえで、学生を指導する実習指導者の動物看護観や指導力、学生への関わり方などの教育技術が重要となる。

動物看護教育における入院看護実習のあり方の検討（第3報） ～動物看護学生の感じたヒヤリハット調査結果を分析～

○齋藤 みちる¹⁾ 小嶋 哲也³⁾ 石岡 克己²⁾ 左向 敏紀²⁾ 松原 孝子²⁾

- 1) 七里ヶ浜ペットクリニック 2) 日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科 臨床部門
3) みずほ台動物病院

はじめに

臨地実習では、学生は、学内で学んだ知識・技術を活用して、対象の個別性に応じて看護を展開することになる。同時に、対象との関係形成や援助効果を実感したり、理想の動物看護師に出会い、職業的アイデンティティの基礎を支え、専門職業人としての発達を支える場でもあると言われている。しかし、一方では、技術も未熟な学生にとっては、予測の立たない、不慣れな環境であり、生命の危機にある動物を目の前に不安や恐怖を感じていることもある。時には、実習による負の体験が十分な学習効果につながらない可能性もある。そのためにも、学生が直面しうる問題を予測し、回避し対処できるように、学生が感じているヒヤリハット内容を把握することは重要である。そこで、本研究では、一昨年より導入している、学生の受持ち制による入院動物看護実習における終了時のアンケートの内容を分析し、学生が感じているヒヤリハットを調査分析した。その結果、今後の実習指導教育の示唆を得たので報告する。

1. 研究方法

- 1) 対象：N大学 獣医保健看護学科3年生医療センター実習科目履修者。

平成23年度は85名（実習期間は2日間）平成24年度は79名（実習期間4日間）2年間に渡る学生の合計人数は164名

- 2) 方法：①実習最終日に実習に対するアンケートの1項目の「実習中、自分が援助している時に、患者動物が不利益を受けるような、また、事故につながりそうな出来事を見たり、経験したことがあるか?」という設問に対して、「ある」と答えた学生の年度別の割合の調査を実施。②また、『ある』と答えた内容の学生に関するインシデントの割合の明確化。③学生に関するインシデントの状況分析の割合を調査した。

2. 結果および方法

①平成23度はアンケートに答えた全学生のうち25%が『危険と感じた出来事の見撃や経験』が『ある』と答えた。また平成24年度『ある』と答えた学生は48%。②2年間共『ある』と答えた学生の60～70%は本人が経験した内容のインシデントであった。③インシデントの状況分類は注意不足、知識技術不足、病棟スタッフとの関わり、危険性予測の困難、患者理解の不足、情報伝達の不足、環境・設備の不備などがあった。そして、『危険性予測の困難』に関するものが一番多い結果となった。これらの結果より、注意不足や知識技術不足で実習に入っている様子が見られた。受持ち患者動物の情報を収集しても、実際の患者動物に援助を実施する際に、危険を予測することができずヒヤリハットを感じていることが明らかになった。指導上の課題としては、前日や当日の朝に、学生の実習における行動計画を確認しているが、具体的に何を注意して、そして、どのようなことが危険につながるのかを予測させる関わりや、実践する時に学生が内容的に理解しているか、事前の関わりが重要であることが明らかになった。

ひも引き協力課題を用いたラットの協力行動

○草山 太一¹⁾ 川村 尚彦¹⁾

1) 帝京大学文学部心理学科

近年、ヒト以外の動物を対象にした協力や共感に関する研究が行われている。他者と協力するためには、互いの利益や目標の理解、相手の行動のモニターなど、複雑な社会的認知能力が要求される。このことから、このような協力に関する行動はヒト以外には認められにくいと考えられてきたが、近年、ひも引き協力課題などの手続きによって、チンパンジー、ゾウ、カラスなどいくつかの動物種を対象に、それぞれの動物の協力関係に関する検討が行われ、その進化的起源を探る動向も認められている。ひも引き協力課題とは、2 個体以上の複数個体と同じタイミングでひもを引くことで、餌の入った実験装置を手元まで引き寄せ、両個体ともが餌を獲得することができる手続きを指す。もし1 個体が相手の行動を無視して、単独でひもを引いても餌を獲得することはできない。本研究では、ひも引き協力課題を用いてラットの協力行動について検討することを目的とした。

単独飼育もしくはケージメイトがいるラットを対象に、2 個体が同時にチェーンを引くことで、餌の入った台車を手元まで引き寄せることができるかどうか、訓練を実施した（同時ひも引き協力課題）。その結果、訓練を重ねることによって、全てのペアは同時に台車を引いて、餌を獲得することができた。

続いて、この同時ひも引き協力課題について、ラットが互いに協力して課題を解決しているかどうかを詳細に調べるために、1 個体のスタートを遅らせる遅延ひも引き協力課題による検討をおこなった。しばらく時間が経ってから、もう1 個体をスタートさせることで、先に装置に入った個体が後から来る個体を待って、協力して台車を引き寄せることがどうかを調べる課題である。その結果、最初から遅延ひも引き協力課題の訓練をおこなったペアでは、相手が装置の近くに来るまで待って、お互いに協力して台車を引き寄せることに成功した。

ひも引き協力課題は、まさに他者の存在をなくしてはなし得ない課題である。ラットが示した反応が果たして我々ヒトと同等な協力関係に基づくことかどうかはさらなる詳細な検討が必要であるが、本研究からラットが他者の行動をモニターできる能力があることが明らかとなった。

イギリス・アメリカの動物看護の歴史からみる日本の動物看護の現状と報告

○山川 伊津子¹⁾

1) ヤマザキ学園大学 動物看護学部 動物看護学科

2013年2月・3月に、動物看護統一認定機構による初めての動物看護師統一試験が実施された。これまで各民間団体によって実施されていた資格試験が一本化され、公的資格へ向けての第一歩が踏み出されたと言える。しかしながら動物看護職が高位平準化した真の専門職として社会的認知を得るには、いまだ課題は山積している。そこで、我が国より一足先に動物看護職の公的資格化を達成し、社会の中で一定の評価を受けているイギリスとアメリカのその歴史を振り返ることで、日本の動物看護の現状および今後を考える一助としたい。

イギリスとアメリカにおける動物看護の発生は異なるが、Veterinary Nurseといわれるイギリスの動物看護師の歴史は、20世紀初頭のCanine Nurseという「イヌの看護師」から始まる。1960年代には、王立獣医師会(Royal College of Veterinary Surgeons: RCVS)が「動物看護補助職」という資格を認め、動物看護師の職能団体も設立されるが、看護師/nurseという言葉の使用が法的に認められるには、80年代半ばまで待たなければならなかった。1990年代初頭には獣医師法が改正され、動物看護師の業務内容は明確に規定されている。

アメリカでの動物看護教育は、1960年代初めに、軍隊と民間とでほぼ同時期に開始された。アメリカ獣医師会は、動物看護師の呼称に、veterinaryという言葉を使用することを80年代末まで認めなかったため、Animal (Health) Technicianという言い方が当初一般的であった。現在、アメリカ獣医師会認定校のプログラムを修了し、国と州の試験合格後資格を取得した動物看護師は、Veterinary Technicianと呼ばれ、その業務内容は各州の法令により定められている。

日本の動物看護教育の歴史は約40年前に遡り、以来教育内容、ライセンス、業務内容等統一規定されたものは存在しなかった。ペットブームとともに小動物の臨床が増大し、動物看護職の必要性が社会の中で求められる中、日本獣医師会や農林水産省において、動物看護職の制度化に向けての検討がなされてきた。このような動きの結果、2009年には動物看護職協会が動物看護師の職能団体として設立された。さらに資格の統一化を図るため、民間の5団体による共同試験問題作成、動物看護統一認定機構の設立を経て、第1回の統一試験の実施の運びとなった。

イギリスでは半世紀近く、アメリカでは30年以上前に動物看護職の職能団体が設立され、早い段階で動物看護職自身による専門職として活動がなされるなか、その制度化が図られた。このような両国に比較し、日本ではようやくそのスタート地点に立った状況である。統一資格にはこぎつけたものの、教育の平準化、業務内容の標準化、社会的地位の向上等今後の課題は多い。ヒトと動物の共生社会において、動物看護職が果たすべき役割は大きく社会の期待も強い中、イギリスやアメリカのような制度化されたなかでの動物看護職の活躍が、日本でも待ち望まれる。

動物看護を考える

○古本 佳代¹⁾ 北 徳¹⁾ 古川 敏紀¹⁾

1) 倉敷芸術科学大学 生命科学部 生命動物科学科

【背景・目的】現在、数多くの動物看護実践の報告がされているが、我が国の動物看護は人医療の看護理論に基づく、人医療の看護理論を部分的に変えた動物看護理論に基づく、個人の考えに基づく、のいずれかで実践されており、矛盾が生じた状況になっている。我が国の動物看護学進展の一助となることを目的とし、現状の動物看護における問題点の抽出および問題解決に向けた概念の検討を行った。

【問題点の抽出】動物看護職協会の「動物看護者の倫理綱領」によれば、動物看護の対象は「看護動物とその飼養者」とされているが、「人」を看護の対象とするのであれば保健師助産師看護師法に抵触することになる。動物看護の対象はあくまでも「動物」であり、飼養者への情報提供や信頼関係の構築等は動物看護者の業務であっても「看護」そのものではないと考えられる。また人医療の看護理論は動物看護者の「看護観」を養う際には非常に有用であるが、人と動物のコミュニケーションは非言語的であることから、動物看護への応用は基本的には不可能であると考えられる。動物看護、動物看護者の看護観、動物看護者の職務が混在し、我が国の動物看護となっているのが現状の大きな問題であると考えられる。

【概念の検討】動物に対し飼養者、動物看護師、獣医師の全てが看護を実践することは可能であり、動物看護を専門の職業としているのが動物看護師であると我々は考えている。また動物看護は狭義には獣医療行為であると考えられがちであるが、動物福祉に包含されるものであると考えている。そのため動物看護を考えようとすると、動物福祉を如何に考えればいいかを避けては通ることが出来ない。そこで動物福祉の新しい概念として Quality of Now (QON) および Quality of Memory (QOM) という概念を提案する。QON を今の状況に快・不快の感情の判断のもとと行動している動物の「今の満足度」、QOM を「QON の記憶の質」と定義すると、高い QON は良い QOM を、低い QON は悪い QOM を導くと考えられる。Quality of Life (QOL) という概念は人には適用可能であるが、動物には難しいというのが我々の考えである。人は QOL を考える際、遠い未来を予測しながら様々な取り組みを行う。結果的に QOL が向上するのであれば、一時的な不快感について我慢することが出来る。しかしこの予測するという能力が動物に備わっているかは不明であり、動物がこの概念を理解することは不可能であると考えられる。例えそれが病気の予防や治療であったとしても、一時的に不快感を与える場合には、動物はむしろ行為を妨げるような行動をとる。すなわち、動物福祉に配慮して動物に接する際には QON と QOM に配慮し、高い QON の積分に努める必要がある。そして、動物看護の機能は、動物が健康・不健康問わず健康の保持・増進、健康への回復を援助する事であること、看護行為が動物の体内環境に直接アプローチするのではなく動物を取り巻く環境を整えることに主体が置かれていることも考慮に入れると、動物看護とは「動物の QON と QOM の向上に配慮し、体外環境を整える事で体内環境の維持・回復を援助すること」と定義することが出来るのではないかと考えられる。

ネコの水分摂取量と尿量・尿比重との関係の研究

○三好 哲平¹⁾ 中山久仁子²⁾ 桜井富士朗²⁾

1) みずほ台動物病院

2) 帝京科学大学アニマルサイエンス学科

要旨

イエネコ (*Felis silvestris catus*) の正常尿値 (尿量 22~30mL/Kg/日、比重 1.015~1.050) は、イエイヌ (*Canis lupus familiaris*) の正常尿値 (尿量 24~40mL/Kg/日、比重 1.015~1.040) と比較して、排泄量が少なく、高張であることが知られている。1~2) このことがネコの、膀胱あるいは尿道に影響する病気の総称である下部尿路疾患 (FLUTD) およびストルバイト尿結石症発生の要因となることが指摘されている。3~4) このたび私たちは、室温 25 度の環境下で飼育室のネコ用ゲージ内で個別に飼育されている環境下のネコ (n=7) において、「ドライフード (水分 5.6% 以下) と自由飲水」食 (条件 A)、および「ウェットフード (水分 74.8% 以下) と自由飲水」食 (条件 B) 給与の 2 条件下において、水分摂取量と尿量・尿比重の関係と比較調査した。

条件 A で、半日の飲水量 (みかけの飲水量) は 66.9 ± 22.1 mL であるが、フード中水分量と飲水量の総和である総水分摂取量 (絶対飲水量) は 68.2 ± 23.3 mL となった。条件 B で、みかけの飲水量は 22.7 ± 20.13 mL にすぎないが、絶対飲水量は 95.6 ± 37.6 mL となり、ドライフード食給与群よりウェットフード食給与群の方が絶対飲水量が増加することが分かった。

尿量・尿比重においては、条件 A では半日あたり尿量 28.8 ± 11.8 mL、尿比重 1.049 ± 0.010 であったが、条件 B における尿量平均は 49.5 ± 31.4 mL、尿比重 1.030 ± 0.010 と、ウェットフード給与群においては、ドライフード給与群と比較して有意に尿量が増加し、尿比重が低下することが分かった。 ($P < 0.01$)

本研究により、平均的な飼育環境においてドライフード給与時には、みかけの飲水量は増加しても、尿量は増加せず尿比重は高張であり、ウェットフード給与時 (缶詰、パウチなど) には、みかけの飲水量は少なくても尿量は増加し、尿比重は低下することが明らかになった。本研究によって、キャットフード給与の差によるストルバイト尿症や FLUTD 発生増加の 1 要因が解明できた。

キーワード：ネコの飲水量、ネコの尿量、ネコの尿比重、FLUTD

家庭飼育動物における子宮蓄膿症と化膿性疾患の細菌検索

山谷 悠介¹⁾ ○小澤 達哉²⁾ 伊藤 亜也香²⁾ 井上 愛冬²⁾ 渡辺 隆之²⁾ 村上 洋介²⁾

1) 国際ペット総合専門学校 2) 帝京科学大学

1. 目的

家庭飼育動物の細菌感染症には様々な部位や臓器に多種多様な細菌が関与している。獣医師および動物看護師がそれぞれエビデンスに基づく診断・治療および看護を行うためにも、細菌感染症に関与する起因菌の迅速な性状解明が必要である。演者らは、東京都内のA動物病院で診察を受けた家庭飼育動物の症例のうち、頻繁にみられた子宮蓄膿症および皮膚や口腔の化膿性疾患を対象に細菌検査を試み、起因菌の種類と抗菌剤への感受性などを調べたので報告する。

2. 材料と方法

2012年2月～2012年12月の期間に、A動物病院からイヌとネコを中心とした子宮蓄膿症および化膿性疾患を疑う症例20例の細菌検査を実施した。検査材料は各症例の患部から市販の細菌検査用スワブを用いて採取した。分離培養には、好気培養ではハートインフュージョン寒天培地及び血液寒天培地を、嫌気培養では変法GAM寒天培地を用いた。細菌コロニーが得られたものについて各々グラム染色したのち、定法により生化学試験及び抗菌薬感受性試験を行い、分離菌の同定と薬剤耐性を調べた。

3. 結果

イヌとハムスターの子宮蓄膿症7症例のうち、菌分離が可能であったイヌの5症例からエシェリキア属(大腸菌)3株及びシュードモナス属1株が、また、同じくハムスターの1症例からプロテウス属1株及びブドウ球菌属1株が検出された。さらに、イヌとネコの化膿性疾患の11症例のうち、菌分離が可能であった6症例から、ブドウ球菌属5株、バシラス属4株、大腸菌2株、ミクロコッカス属1株、ボルデテラ属1株、エロモナス属1株及びパスツレラ属1株がそれぞれ検出された。分離菌の薬剤耐性を調べたところ、一部の抗菌剤に対して耐性を示すものもみられたが、多剤耐性菌と考えられるものや、ブドウ球菌属についても生物学的性状から判断してメチシリン耐性を示すものはみられなかった。

4. 考察

本調査において家庭飼育動物にみられた子宮蓄膿症や皮膚等の化膿性疾患には、これまでの報告と同様に多種類の常在性細菌が関与していることが明らかになった。各症例の凜告から、発病の誘因として飼育環境や創傷などが疑われるものがあった。今後も家庭飼育動物の細菌感染症に関与する起因菌の調査を重ねその予防に活用するとともに、検査結果を迅速に動物医療の現場に還元することで動物医療に貢献して行きたい。最後に貴重な症例材料を提供して頂いたA動物病院の皆様に深甚の謝意を表す。

歩行障害の高齢犬に対するコラーゲンペプチド投与が歩様に及ぼす影響

中山 久仁子¹⁾ ○小林 良輔¹⁾ 丸山 愛¹⁾ 山下 菜摘¹⁾
秋山 絵梨¹⁾ 阿部 仁美¹⁾ 桜井 富士朗¹⁾

1) 帝京科学大学 生命環境学部 アニマルサイエンス学科

コラーゲンは近年、健康補助食品（サプリメント）として広く利用されており、その作用に関する学術的な報告も増えている。しかし、ペットに対する効果についてはほとんど報告がない。そこで本研究では、骨・関節に対するコラーゲンの効果に注目し、加齢により歩行障害を示す犬にコラーゲンペプチドを経口投与し、歩様に変化が見られるかをビデオ撮影、血液検査等で検証した。つくばわんわんランド（茨城県つくば市）の老齢犬（9～13歳、13頭。犬種、性別は不問）のうち、9頭に0.25g/kg体重/日でコラーゲンペプチドを3ヶ月間餌に混ぜて経口投与し、4頭は非投与の対照とした。対照群では2頭が「変化無し」、2頭が「改善」であった。一方、コラーゲンペプチド投与群では9頭中の5頭が「改善」であった。「変化無し」は4頭であったが、このうち3頭は他の疾患が強く疑われ、コラーゲンペプチド投与の評価には適さないと考えられた。以上の結果から、コラーゲンペプチドの投与により加齢による歩行障害が低減する可能性が示唆された。

動物看護師教育における実習教材の開発

阿部 仁美¹⁾ ○辻田 夏希¹⁾ 長野 早紀子¹⁾ 村尾 信義²⁾ 桜井 富士朗¹⁾

1) 帝京科学大学 生命環境 2) 倉敷芸術科学大学 生命科学)

獣医療(獣医師・動物看護師養成教育)の実習教育では、現在まで座学もしくは生体の使用が一般的であった。将来獣医療をになう人材であっても、獣医学生・動物看護学生は動物教材使用に対して素人であり、未熟な学生が生体を扱うことにより、動物達は過大なストレスを受けていると考えられる。また実習教育は、動物実験としての認知を受けなければならない。

一方ヒト医学・看護教育では、シミュレーションモデル教材を用いた実習が広く行われてきている。動物看護学の臨床実習教育でも、動物シミュレーション実習教材の導入は、動物実験の3つのR (Refinement, Reduction, Replacement) の意味からも代替法の開発が急がれる。

私たちは、イヌ・ネコの看護教育の現場において使用できる教材の開発を行い、実習教育への応用を実践してきた。今回は、その一端を紹介することで、協力してシミュレーション教材研究、および動物看護教育研究法の検討を実践する同志を募りたい。

祝 日本動物看護学会第22回大会 開催

尾崎理化株式会社

〒 252-0153

神奈川県相模原市緑区根小屋1888番地

TEL 042-784-2525

祝 日本動物看護学会第22回大会 開催

有限会社友愛メディカル

〒 333-0811

埼玉県川口市戸塚4215

TEL 048-291-0655

祝 日本動物看護学会第22回大会 開催

株式会社

日本ベテリナリーサプライズ

〒 174-0041

東京都板橋区舟渡2-29-14

TEL 03-5970-1717

祝 日本動物看護学会第22回大会 開催

株式会社AVS

〒 160-0023

東京都新宿区西新宿1-22-2新宿サンエービル5階

TEL 03-3340-2014



shikibo

祝 日本動物看護学会第22回大会 開催

マースジャパンリミテッド

〒 153-0064

東京都目黒区下目黒1丁目8番1号アルコタワー-9階

TEL 03-5434-3311

日本動物看護学会 第22回大会 実行組織

大会長	村上 洋介	(帝京科学大学)
実行委員	藤永 徹	(帝京科学大学)
	多川 政弘	(帝京科学大学)
	大辻 一也	(帝京科学大学)
	桜井富士朗	(帝京科学大学)
	近藤 保彦	(帝京科学大学)
	加隈 良枝	(帝京科学大学)
	関口麻衣子	(帝京科学大学)
	石黒 敏一	(帝京科学大学)
	渡辺 隆之	(帝京科学大学)
	柳澤 綾	(帝京科学大学)
	川村 和美	(帝京科学大学)
	小泉亜希子	(帝京科学大学)
	庄司さやか	(日本動物看護学会事務局)
	小野寺 温	(桜井動物病院)
	長野早紀子	(桜井動物病院)

お断り：本誌に掲載された全ての記事内容は無断で複写・複製（コピー）・
転載することを禁止します。

日本動物看護学会 第22回大会 抄録集

2013年7月1日 発行

発行人 会長代行・理事長 桜井富士朗

発行元 日本動物看護学会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館23階

TEL. 03-6804-2659 FAX. 03-6804-2649

E-mail info@jsan.gr.jp HP <http://www.jsan.gr.jp>

印刷 株式会社 オルツ

猫用
VETERINARY
EXCLUSIVE
動物病院
取扱品

下部尿路疾患の猫のための

「嗅覚」にこだわった食事

「オルファクトリー」登場。

「pHコントロール オルファクトリー」は、猫の嗅覚(オルファクシオン)にこだわった新しい猫用食事療法食です。



pHコントロール オルファクトリー

URINARY S/O OLFACTORY ATTRACTION

「高い嗜好性」を決める要因は、猫によって異なります。

食事の嗜好性には、「嗅覚」、「味覚」、「摂食後の消化状態」などの複数の要因が影響します。



嗅覚



味覚



消化

新しい嗜好性の選択肢「嗅覚」を加えることで、下部尿路疾患(FLUTD)の猫に必要な食事療法が受け入れられるチャンスが大きく広がります。「pHコントロール オルファクトリー」は、嗅覚刺激を最適化するために、特定の香り組成となる原材料を選択し、独自の香り組成に調整しています。

S/O
INDEX
pHコントロール



新発売

[規格] 500g / 2kg / 4kg

VETERINARY

ROYAL CANIN

製品群の栄養に関するご質問は
テレフォンサポート

0120-761-101
受付時間 10:00~17:00 (土日、祝日を除く)

www.royalcanin.co.jp/

ロイヤルカナン ジャポン Inc.
〈販売者〉
共立製薬